

前書 き

文化庁では、今後の国語施策の改善に資するために、明治以降、今日に至るまでに発表された国語施策の改善に関する各種の案及び実施された施策並びにそれらに関する論評等を計画的に収集整理し、「国語施策沿革資料」として、まとめることにしている。

本集は、その第五集として、「現代かなづかい」実施当時の手引き書、調査資料等を収録し簡単な解説を加えたものである。

昭和五十八年九月

文化庁文化部国語課長

後 藤 英 夫

凡 例

一 本資料集は、「現代かなづかい」実施当時の手引き書、調査資料等八種類の文献を収録したものである。

二 各文献は、底本とした資料の原文のまま採録することを原則とした。ただし、

1 漢字は現行の字体に改めた。

2 明らかに原文の誤植と認められるものは訂正した。

3 振り仮名、傍点の類は、特に必要と思われるものは省略した。

三 参考のために、各文献の前に簡単な解説を添えた。

四 本編の編集・作成は、主任国語調査官 安永 実 と国語調査官 亀原壮夫が当たった。

「現代かなづかい」について

(昭和二十二年五月)

文部省内国語問題研究会

単行本「国語の新しい書きかた」(昭和二十二年五月刊)
の第四章として書かれたもの。現代かなづかい制定の立場、
現代かなづかいの書き方で注意すべきもの、現代かなづか
いと文法について解説している。

「現代かなづかい」は、どういう立場からきめられたか。

このたび、当用漢字表が決定し、広く社会に実行されるこ
ととなった。これによって漢字の制限が、大いに進展する
ことと思われるが、漢字の制限が行われると、今まで漢字で
書かれたことばも、今後はかなで書きあらわすこととなる。
わが国文化の民主化の一般的傾向に伴って、むしろ新しい漢字
や言いまわしがすたれて、やさしいことば、判りやすい言い
まわしで、文章を書くという風が盛んになることと思われる。
その結果、文章にかな書きの部分が非常に多くなって、従来

の漢字を主として、それになをまぜて書いた文章は、逆転し
て、かなに漢字をまぜて書いた文章、いわば漢字まじり文と
いうものに進展することが予想される。国語表記上の大きな
変革といわなければならない。

ことばをかなで書きあらわす時に、第一にぶつかる問題は、
どういうかなづかいによって書いたらよいかということであ
る。すなわち、かなづかいの標準をどうするかということが、
今までよりも、もっと切実な問題として、われわれの目の前
にあらわれてくる。

今までのかなづかい、いわゆる歴史的かなづかい(ある
いは古典的かなづかい、復古かなづかいともいう)をそのま
ま用いてさしつかえないか、それとも歴史的かなづかいをや
めて、他の標準によるかなづかいを採用した方がよいかとい
う問題である。それには歴史的かなづかいと、他の標準による
かなづかいとの得失を考えて、どちらがはたしてわれわれの
準則とすべきものであるかを明らかにしなければならぬ。
このたび決定した現代かなづかいは、その得失について検討
した結果、現代の国語を表記するかなづかいとしては、現代
の標準的語音に即応した新しいかなづかいを採用すべきであ
るという結論に達し、それには現代の発音にもとづいて、あ
らたにかなづかいを制定すべきであるということになって、

その結果できたものである。

いったいかなづかいとは、どういう性質のものであろうか。ことば通りに解すれば、かな文字のつかい方ということであるが、実際にはもつとせまい意味に用いられている。ことばをかなで書く時に、どのかなをつかったらよいか、それが問題になることがある。その場合のかなのつかい方に限って、かなづかいというのが、今日いうところのかなづかいである。

およそ、いかなる国語でも、古代においては、発音と文字とは一致していた。口で発音する通り、文字に書きうつされたのである。ところが発音は流動的なものであるから、時がたつに従って、だんだん変化して行く。それに反して、文字の方は定着性をもつために、発音に歩調を合せて行くことができず、もとのまゝの書き方を保存する傾向が強い。この発音と文字との不一致から、かなづかいの問題が起ってくるのである。

発音が変化して、文字と一致しなくなるために、一つの文字が、二つ以上の発音をもち、また一つの発音が、二つ以上の文字によって書かれるという現象が起ってくる。たとえば「ふ」といふかなは、

ふね (船 *hune*) うたふ (歌ふ *utau*) たふす (倒す *taosu*)

けふ (今日 *kyō*) たふ (塔 *tō*) きふ (急 *kyū*)

のように、いろ／＼な発音を代表する。また「オ」という発音は、おや (親 *oya*) をとこ (男 *otoko*) あふぐ (仰ぐ *aggu*) かほ (顔 *kao*)

のように、いろ／＼な文字によって代表される。そこで同一のことばでありながら、その書き表わし方が、いく通りにでもなるといふことが起ってくる。この場合にどのかなをつかうべきか、それを定めたものが、かなづかいである。

山、雲、月、人、草、道などということばは、「やま」、「くも」、「つき」、「ひと」、「くさ」、「みち」と一つの書き方しかないが、大山ということばになると、

おはやま、をはやま、おうやま、をうやま、おをやま、を
おやま、おふやま、をふやま、おおやま、ををやま、を

のように、いろ／＼な書き方があり得るし、また、むかしから、実際のいろ／＼に書かれて来ている。それでは一つのことばに、いく通りも書き方があって不便であるから、それを統一しなければならぬが、なにを標準にして統一したらよいか、それが問題になる。その場合古典の用例に従って、「おはやま」と書こうというのが歴史的かなづかいであり、また、その基準を現代の発音に求めて、「おおやま」と書こうというのが発音的かなづかいである。

古代のかなづかいは、その当時の発音にもとづいて書かれ

たものであるから、書き方がまち／＼になるということとはなかつた。それであるからその書き方によつて、かなづかいの一つの標準が成立するわけである。古典の用例を基準として、かなづかいを定めるといふのが、歴史的かなづかいの根柢である。これに対して文字と発音とは、もともと一致すべきものであるという原則にもとづいて、今日われ／＼が発音している通りに、かなづかいを定めようというのが、発音的かなづかいの立場である。

いったいわが国で、かなづかいが問題とされるようになったのは、鎌倉時代以来のこととて、普通に「定家かなづかい」と呼ばれるものが、鎌倉室町時代を通じて、当時の知識階級である公家社会に行われた。「定家かなづかい」は藤原定家の制定に源を発し、その後増補を加えられたものであるが、その基準とするところが、必ずしも明確でなく、十分学術的に定められたかなづかいとはいえないものであった。江戸時代になってからは、契沖・宣長などの国学者によつて完成された歴史的かなづかいが勢力を得るようになったが、これも当時は、行われた範囲が局限されていて、国民全体の国語表記法であつたとはいわれない実情にあつた。歴史的かなづかいが、かなづかいの標準として、あつかわれるようになったのは、明治以後国民教育の上に採用されてからのことである。

明治初期以来、八十年の実施のあとをかえりみて、われ／＼は、その成績を、成功とみてよいのか、または失敗とみなければならないのか、歴史的かなづかいが、真にかなづかいの標準として、十分に国民に徹底しているのであらうか、もしも歴史的かなづかいが真に体得されて、完全に使用されているならば、かなづかいの不統一と混乱は起り得ないはずである。明治初期における歴史的かなづかいの採用は、真に時代の要求にかなつたものであつたかどうか、われ／＼は深く反省してみなければならぬ。

本来かなづかいは、ことばをかなで書きあらわす場合の準則である。したがつてことばの発音が変わつてくれば、それに伴つて、かなづかいも変わるべきものである。ことばの発音は変つてゐるのに、それを書きあらわすかなづかいの方は、今まで通りというのでは、不合理といわなければならぬ。かなづかいが言語理論の面からも、また守り得ないものを捨てて、守り得るものを、新しく打ちたてる、そしていったん打ちたてた新しい準則はどこまでも守るという実践倫理の面からも、現代人のためのかなづかいが制定されなければならない。

歴史的かなづかいは、これを学習するものにとつて、非常に困難があつた。あることばをかなで書くのに、実際の発音通りに書くことができない。発音とはちがつた語形を思い

出して書かなければならない。そこに心理的に不自然な点がある。したがってかなづかいの学習には多くの時間をついやし、しかもいち／＼機械的に覚えなければならない。語源の判るものは類推的に覚えることもできるが、語源の判らないものは、まったく機械的に覚えるよりほかに道はない。そのため教師は骨折って教え、かなづかい学習のために、多くの時間がさかれるが、生徒の方は、覚え切れずに終わってしまうというのが、今までの国民教育の実情である。教育上の負担を軽くし、これを合理化する上からみて、かなづかいを新しく制定して、文字使用の平易化をはからなければならぬ。

さらにまた、歴史的かなづかいは、どの程度に社会に行われているのであろうか。日々の新聞・雑誌・広告・ポスターなどのかなづかいの混乱には、ずいぶん目にあまるものがある。国民教育において、かなづかいを完全に教えることが不可能である上に、歴史的かなづかいは現代のことばと交渉のないものであるから、社会はかなづかいに対して関心もてないのである。社会におけるかなづかいの混乱のために、日常生活の能率の低下は、はなはだしいものがある。現在の印刷物は漢字かなまじり文で書かれているから、かなづかいはあまり目立たないが、今後は漢字の制限が強化されて、かな表記の部分が多くなると思われる。そうすればかなづかい

の混乱がいつそう表面に表われて、日常生活の運営をさまたげることであろう。かように一般社会生活の能率を高める上からみても、新しいかなづかいの制定は急を要する問題である。

昭和二十年八月終戦以後、わが国の民主化の根本的課題として、国字の平易化がとえられ、その第一歩として、漢字制限とかなづかい改定とが強く要望された。国語審議会は、その具体案の作製について審議を重ね、ついに成案を得、閣議決定を経て、実施の運びになったことは、明治以来の懸案が、国家再建の門出において、解決をみたというべきで、わが国文化の将来のために意義深いものがあると感ずるのである。

現代かなづかいを定めるにあたって、いかなる標準によるべきかは、今まで述べたことによつて、ほゞ明らかになったと思う。なるべく現代のことばのすがたを忠実にあらわすということが、根本方針であるが、従来の歴史と表記の習慣とにかえりみて、十分の考慮をはらうべきは当然である。この案のまえがきに、

一、このかなづかいは、大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。とあるように、現代語の発音によつて定められたものであるが、助詞の「は」「へ」「を」の場合、二語の連合によつて

生じたち、づ、同音の連呼によって生じたち、づの場合は、もとのまゝにするという除外例を設けている。

この種の準則には、除外例を設けない方が、組織の上からも、取りあつかいの上からも、都合がよいのであるが、かなづかいのような問題は、理論だけでは片づけられない。国民感情や表記の習慣からも考慮しなければならない。さしあたっては、この程度の余地を残して、国民の総意に訴えるという意図をもっているのである。

なお、現代かなづかいは、現代の標準的発音に基準を求めたもので、発音主義といつても、個人が自分勝手の発音によって書くということではない。もし個人がめい／＼勝手に書くことを認めるならば、かなづかいの混乱を倍加するのみで、何ら統一にはならない。現代かなづかいは、新しい準則であるから、やはりいちおう学習して覚えなければならない性質のものである。その点では、従来の歴史的かなづかいと同じことである。たゞ学習すれば覚えられるという点において、従来のかなづかいは比較にならない。何ら学習することなくして、今度のかなづかいもむずかしいなどというのは当たらないのである。

現代かなづかいの適用の範囲については、まえがきに、
一、このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のも

のに適用する。

一、原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

とあるので、いちおう明らかである。

現代かなづかいは、現代文のうち口語体のものに適用することをたて前とする。従って文語体のものには、原則として適用されない。しかし現代文の傾向として、文語体のものは極めて特別なものとなっており、一般には口語体のものが行き渡っている。今後社会に行われる「書くかなづかい」としては、現代かなづかいが採用されることはいうまでもない。過渡の時代として、多少の不統一はまぬかれないうと思うが、諸官庁の公用文、新聞雑誌その他の印刷物、商用文、個人の書簡文などに至るまで、現代かなづかいによって統一される日は、遠くないであろう。また、国民教育に用いられる各種教科書にも、平易な口語文とともに、現代かなづかいが採用されることは当然である。

従来の歴史的かなづかいは、どうなるのか。原文のかなづかいによる必要のあるもの、すなわち古典のかなづかいはもとのまゝである。また戸籍に記載された姓名のかなづかいなどは、法規上変更の困難なものであるから、それらも、もとのまゝにしておいてさしつかえない。かような関係から、歴

史的かなづかいは、「読むかなづかい」として、少なくとも理解し得るだけの教育は授ける必要がある。したがって国民教育の適當の時期において、歴史的かなづかいが教えられることはいうまでもない。

かように現代かなづかいは、現代人が現代語を書きあらわすためのかなづかいとして、積極的意味を持つものであり、歴史的かなづかいは、国民教養として、古典および従来の文献を読むためのかなづかいとして、消極的意味を持つに至るであろうと思われる。

新かなづかいの書き方についての諸注意

新かなづかいは一くちに発音かなづかいと呼んでもあやまりではないくらいに、大体、発音の通りに書けばよいのであるが、しかしやはり一種の約束であるから、それには若干の勉強が必要である。それについて注意すべきことがらを左に述べる。

一 「は・へ」と「を」

新かなづかいでのいちばん大きな要点の一つは、これまでのかなづかいで語頭以外の「はひふへほ」を「ワイウエオ」とよんでいたことをやめて、「ワイウエオ」と発音するものはすべて「わいうえお」とかくようにしたことである。

例 かわ川^{カハ} かい貝^{カイ} おもう思^{オモ}フ うえ上^{ウエ} かお顔^{カオ}

例外は助詞の「は・へ」だけである。

例 私は 私には 私では

こちらへ あちらへ

【問】 「さえ」はなぜ「さへ」としないのか。

【答】 これは「添^ツへ」から来たもので、一音の「へ」とは別である。（一音の「へ」は「方^ハ」から来たものと考えられている。）

【問】 「では、きょうはこゝまで。」などの「では」は副詞化している。これは他の副詞の「あるいは」「もしくは」などとともに「わ」でよいか。

【答】 それはたしかにいちおう筋の通った話であるが、さて「は」をのこした過渡的処置の精神に照らして考え直してみれば、やはりこれらにも「は」をのこしておくのが穩当であろう。

【問】 助詞も早く「わ・え」に統一してはどうか。

【答】 公論の帰するところがそこにあればもちろんそうしたい（特に「へ」は最も力がよい）。新かなづかいの例則に「は・へ」を「本則とする」としてあるのは、実はその辺の含みを持たせてあるものと解してよい。

「を」は必ず「を」とかく。これは一種の分ち書きの作用

をなしているから、将来も「を」一本でゆくはずである。

二 「大きい」などのかき方

語頭以外で「オ」とよむ「ほ」を「お」とかく結果、「う」を用いる長音のかき方とまぎらわしいことがある。そこで、この「お」をつかう基本的な語例を左に列挙しておく。

おお 大^{オホ}
おおきい 大キイ^{オホ}
おおさか 大阪^{オホサカ}
おおやま 大山^{オホヤマ}
おおい 多イ^{オホ}
おおよけ 公^{オホヤケ}
おおよそ 大凡^{オホヨソ}
こおり 氷^{コホリ}
ひやしごおり
こおり 郡^{コホリ}
こおりやま 郡山^{コホリヤマ}
こおる 凍る^{コホ}
こおろぎ
しおおす 為遂ス^{シオホ}
とお 遠^{トホ}
とおい 遠イ^{トホ}

おおう 被フ^{オホ}
おおい 被^{オホヒ}
おおかみ 狼^{オホカミ}
おおせ 仰^{オホセ}
おおむね 概^{オホムネ}
とおる (とおす) 通ル^{トホ}
とおり 通^{トホリ}
みとおし 見通シ^{ミトホ}
とゞこおる 滞ル^{トヅコホ}
とゞこおり
ほお 頬^{ホホ}
ほおべに
ほおえみ
ほお 朴ノ木^{ホホ}
ほおずき
ほのお 炎^{ホノホ}

とおとうみ 遠江^{トホタフミ} もよおす 催ス^{モヨホ}
とお 十^ト もよおし
以上、すべてオ列のかなにつくものである。なお「十」だけが旧かなづかい「トヲ」である。

三 『アフ』の発音分化

これまでのかなづかいで『アフ』と書いたのが、その発音の分化にともなつて「あう」「おう」「あお」の三つにかき分けられる。

(旧) あふ

あう例 あう 合フ あらう 洗フ^{アラ} おこなう
おう例 おうぎ 扇^{アウギ} おうさか 逢坂山^{アウサカ}
おうみ 近江^{アウミ} (それで遠江が遠江とな
るのである)
あお例 あおい 葵^{アヲヒ} あおぐ 仰グ^{アヲ} 扇グ^{アヲ}
あおる・あおり たおれる (たおす)
倒レル^{タヲ}

四 標準発音の問題

「頬」の発音はこれまで一般に「ホオ」といつてきたが、近ごろは文字どおりに「ホホ」という言い方が新生層の間にふえてきた(放送で親しみのある人で例をいえば市川八百蔵が「ホオ」で夏川静江が「ホホ」である。)もし「ホホ」を、

(またはをい) 標準語とみとめることとなれば、新かなづかいでも「ほ」とかくことはもちろんである(「ほゝべに・ほゝえみ」など殊にそうである)。

こうした例は、なお、伊香保(地名)の保の字のよみ方などにもあるが、それよりもずっと大きな問題は、ほとんど日本全国の半分にもわたっている次のような動詞の発音のちがい(まちがいではなくてちがい)である。

【例】洗う

- (一)「アラウ・アラツテ・アラッタ」
(二)「アロー・アローテ・アロータ」

現代の標準語としては(一)の方をとっているから、したがって新かなづかいでも「あらう」とかくこととなる。

これまでのかなづかいでは「あらう」でなくて「あらふ」であるというところに力点があつたのであるが、これからは「あらう」であつて「あらう」でないというところに注意しなくてはならなくなった。すなわち、かなづかい以前、いながら同時の問題として標準語の発音の問題が新しく登場したのである。それで、新かなづかいの普及の仕事はたゞちに標準語の普及の仕事ともなるのであるから、一言、こゝに付記しておきたいことがある。それは、標準語の普及とは、いわゆる方言をためなすことや方言をなくすることではなしに、方言とは別に、あらたに標準語の体系を、まず国民の頭の中に

うえつけることだということである。

こゝで、右の「洗う」と同じ動詞の語例を少しあげておく。
あう合・会　ならう習　あつかう扱　かう買　ねがう願
おこなう行　うたう歌　はらう払　とりあつかう　しま
う了　わらう笑　とりはからう

【注意】「拾う」は「ひろう」である(現代の標準語としては「ひろう」でない)。

なお、標準語では次のような動詞の語尾も「ウ」とよむ。

追う「オウ・オツテ」　思う「オモウ・オモツテ」
沿う「ソウ・ソツテ」　誘う「サソウ・サソツテ」

たゞし文語の朗読では長音によむし、また例えば「責任を問うて」とか「承認を請うて」とかというような文語的語句でも長音によむ。

五 「言う」と「結う」

「言う」は「結う」と発音上の区別を普通にはしていないが、主として文法上の考慮から「いう」とかくこととなつたのである。それで活用と発音との関係が次のようになる。

【言】　いわ　ナイ　いい　マス　ユウ　ユウ　ユウ　ユウ　ユウ　ユウ
いえ　いおう

【問】　これに準じて考えれば「宜しゅう」なども「宜しう」でよくはないか。実際の発音でも「シウ」と「シユー」

との中間的なものである。なお、これまでの字音かなづかいで「宮・中」などの「ゆ」はすべて省略してよいということとなっていることも参考となろう。実用的にも許容されたいと思うがどうか。

【答】 その語が正しく認められるために必要で十分な程度において、大体の発音を示せば足りるとするのが正字法精神であるから、大多数の公論がそういうことであるとすれば大いに考慮の余地がある。実用的には電報などでは公にそうかくこととなっている（例えば「シキウ」至急「ヒウガ」日向などのように）。

【問】 「柳生・桐生」などは「やぎう・きりう」でよいか。

【答】 それでよい。実際の発音は「ギウ」と「ギュー」との中間的なものであるが、音韻観念としては「やぎう」であろう。しかし、一般に「やぎう」と「やぎゅう」と、どちらのかき方がよいという意見が多いであろうか。

六 「生命」などのかき方

字音（漢語）の「生・命・例」などのかき方はこれまでの通りである。ただし、それだからといって発音も「セイ・メイ・レイ」などに限るというのではない。たとえば「明治」は、その音韻形式（すなわち語形）として頭の中にあるのは

「めいじ」であるが、実際の発音（すなわち口頭の実現音声）としては「メイジ」から「メージ」にいたるまでの無限の幅を認めるというのが現代の標準語意識である。

【付記】 「水・追」などの「ヰ」はすべて「い」とかく。すなわち「すいえい」水泳など。

七 つまる音と拗音のかき方

つまる音をあらわす「つ」と、拗音をあらわす「やゆよ」とは、原則として小がきにする。それで、入門にはそう教えておいて、次第に同じ大きな字でかいてあっても正しくよみ得るように導いてゆくべきである。

例 きょうきょう今日 がっこうがっこう学校

【注意】 石けん・撃剣・敵艦などはつまるが、貝原益軒・適格・敵艦・易経などはつまらない。（それは単に母音が無声化するだけであって、言わば半促音である。）

「勉強しよう・運動しよう」などの「しよう」を「しょう」と発音しないように注意を要する。

【付記】 助動詞の『マセウ・デセウ』は「ましろう・でしろう」と書くのである。

八 「か・くわ」の区別

家事と火事、自我と自画像などの区別は、現代の標準語意

識ではなくなっているから（将来の全国的な見通しも漸次になくなる方向にあると認められている）、おとなはともかく、子供にはその区別を要求しない方がよい。たゞし、それを区別してかいても誤りとはしないというのが例則最後の「注意」の主旨である。

九 連声のかき方

新かなづかいの大方針によって、次のようにすべて発音の通りにかく。

例 化学反応 はんのう 感応 かんのう 正三位 さんみ 三位一体 さんみ 天皇 てんのう 天王寺 てんのうじ

【注意】 第三位・単位 たんい の数などの場合には連声しないから、もちろん「い」である。

十 「ち・づ」のかき方

国語には、ハッキリと「じ・ず」と「ち・づ」との区別がわかっているものと、そうでなく、ぼんやりとしていて「じ・ず」か「ち・づ」かわからないようなもの（すなわち中性的なもの）とがある。その後の方の者を便宜に「じ・ず」に統一してあらわそうというのが新かなづかいの通則の精神である（実は第三のかなを用いるのが学問的には正しいのであるが）。

例 ふじ フジ（藤） 恥じる チヂル（恥ヂル） みじかい ミジカ（短イ）
みず ミヅ（水） あずき アヅキ（小豆） はずかしい ハッ（恥カシイ）

そして前の方の者を「じ・ぢ」「ず・づ」とかき分けようとするのが「たゞしがき」の精神である（それが国民の国語意識として自然なのである）。

例

島 しま はなれじま 刷 す る…手ずり
血 ち …はなち 釣 つ る…手づり

なお、同音の連呼によって生ずる連濁もこの例によってかき分けるのである。

例

しづみ すづめ すづむ
ちづみ （縮） つづみ （鼓） つづく （続）

ところで新かなづかいの例則には、二語の連合によって生じた「ち・づ」は「ち・づ」とかくとあるのであるが、さてその二語という語の解釈の広狭によって、あるいは「ち・づ」と「じ・ず」とのどちらをかいてよいか、疑問のおこるものがある。その場合に、ある人は「じ・ず」とかき、ある人は「ち・づ」とかく。しかし、それは当分の間は二つとも誤りでないと認めておいて、やがて数年の間に自然におちつくのを待つべきである。その間に実験的研究や公論の調査などをも大いに進めてゆくべきであるが、それについて一つの大切な心がまえは、国語は国民の国語であるという自覚をあらたにして、各種の問題に関する解決を当局者にのみ依頼せず、すべては自主的・批判的に、しかも建設的な態度をもって、

この新かなづかいの完成に国民的に協力するということである。

〔後記〕これまでのかなづかいにはカタカナをもちい、

必要に応じて漢字をもまぜてもちいた。

発音符号にはカタカナで「」をもちい、その
中で特に音声符号に対する音韻符号としてあら
わすのにはひらがなで「」をもちいた。

現代かなづかいと文法

国語の文法は、現代かなづかいの制定実施によって、その説明を改めなければならぬ部分を生じた。もとより話されることばの体系は、かなづかいの変革によって変化するものではないが、今日までの文法は、主として文字に書き表わす場合の規準について記したものの、むしろいわゆる歴史的かなづかいの用法を説くのが第一の目的であるかのように取り扱われてきたものであるから、文法教授の必要は、もはや大半失われたと考える人もないとは限らない。しかし、ことばの実態をつかむために、新しいかなづかいの制定が、よい機会を与えているものであることは言うまでもなく、したがって新かなづかいによる文法の説明は、国民の国語に関する教養を高めるために、かえってその必要をましたとも言いうことができよう。それを言わないまでも、旧かなづかいで文法を学

んだ人にとって、これから後、その知識を適用させることのできない点をわきまえて、その改訂に文法的な道をつけておくことは、じじつ当面の問題であるにちがいない。できればこの際、旧かなづかいの立場をいちおう離れて、全くあらたな体系を考えることが望ましいのであるが、ここにはなるべく、これまで説かれた文法体系の中で改めなければならぬなつた点を指摘するにとどめておこうと思う。

文法でかなづかいが問題となっていたのは、主として活用語の活用語尾であるが、活用の体系を旧かなづかいで支えていたものは、いわゆる五十音図であるから、一種のかな表と見られるこの五十音図をまず改訂することが必要である。第一に、現代かなづかいによるとまったく用いられることのないワ行の「る」「ゑ」の二字を取り去って、その代りには「い」「え」を補わなければならない。そしてまた、「を」は助詞として用いられるだけであるから、これをかっこにいれて「お」を掲げておく。すなわち、「わ・い・う・え・お（を）」をワ行と考えることとする。これが最小限度に必要な五十音図の改訂で、これによると、五十音図の中には「い」「え」がそれぞれア行ヤ行ワ行の三箇所、「う」「お」がそれぞれア行ワ行の二箇所に出ることになる。なお、清音のかなだけでなく、濁音のかなをもあわせ掲げておくと便利で

あるが、その際には、「ぢ」「づ」をそれぞれかっこにいれて「じ」「ず」を掲げる。すなわち、ダ行を「だ・じ(ぢ)・ず(づ)・で・ど」とするので、「ず」は、それぞれザ行とダ行との二箇所にあられる。しかし、これは、さしあつての口語の活用には関係がないと見てよからう。

さて、口語動詞の活用には、上下の一段活用と四段活用とカ行サ行の変格活用との五種の型が認められているうち、変格の二種には問題がない。

一段活用のうちで、下一段活用では、これまでのハ行一段活用(教へる・加へる・言へる等。経る一語を除く。)ヤ行下一段活用(聞える・見える・栄える等)、ワ行下一段活用(植ゑる・飢ゑる・すゑる)の区別がなくなつて、すべて、「える」の語尾をとることになる。これらは活用語尾とは言ふものの、「与え(ない)・与え(ます)・与える・与える(こと)・与えれ(ば)・与えよ」のように、「え」のところは活用の際に変化しないのであるから、何行に属するかを問ふことは不必要とも言えるが、便宜上、「得る」「心得る」とあわせてア行下一段活用と名づけることができるであらう。すなわち、下一段活用は、アカガサザダナハバマラの十二行にあるわけである。

上一段活用では、同じようにハ行上一段活用(強ひる・用

ひる等。干る一語を除く。)、ヤ行上一段活用(悔いる・報いる等)、ワ行上一段活用(居る・率ゐる)が、すべて「いる」の語尾をとることになる。これらは、下一段活用の場合に準じて、あらたにア行上一段活用に収めてよからう。なお、ダ行上一段活用とされていた「恥ぢる」「閉ぢる」の類は、「恥じる」「閉じる」として、「案じる」「感じる」等とともに、ザ行上一段活用の中にふくまれる。すると、上一段活用は、アカガサタナハバマラの十行にあるわけである。(新五十音図で「だじずでど」のダ行を認めれば、「恥じる」「閉じる」等も、もとのままダ行上一段としてもよいはずであるが、歴史的に考えない限り、「案じる」はザ行、「恥じる」はダ行と、区別する必要はない。)

次に四段活用では、ハ行が改められる。すなわち、例えば「思は(ない)・思ひ(ます)・思ふ・思ふ(こと)・思へ(ば)・思へ」「言は・言ひ・言ふ・言へ」が、「思わ(ない)・思い(ます)・思う・思う(こと)・思え(ば)・思え」「言わ・言い・言う・言え」と書かれるので、新五十音図ではワ行に属することになる。そこで、このいわゆる四段活用は、カガサタバマラの各行において活用する例があるわけである。さらにこれらの語の活用形の中に、これまで未然形に助動詞「う」をつけたと説かれていた「思はう」「書かう」

「示さう」等が、「思おう」「書こう」「示そう」等と書かれるので、未然形には、「ない」をつける「思わ」「書か」「示さ」等という形のほかに、「う」をとまなう「思お」「書こ」「示そ」等という形が認められなければならない。(活用表としては、未然・連用・終止・連体・假定・命令の六活用形の次に、第七の形として「思お」「書こ」「示そ」等を立ててもよいが、形容詞・形容動詞・助動詞の活用とあわせ考えて、できるだけこれまでの表の組織を改めないようにするには、未然形に二つの形を認めるのがよからう。) さて、かように、「お」「こ」「そ」等の語尾を認めると、五十音図に照らしてその五段のどれにも活用形をもつわけであるから、これまで四段活用と名づけられていたのは、当然、五段活用と改められるべきであろう。

形容詞の活用では、「よから(う)」「新しから(う)」のように助動詞「う」をつける形(『中等文法』で形容詞未然形とする。以前は形容動詞として説かれた。)が、「よかる(う)」「新しかる(う)」となる。助動詞「たい」も、同じように「(行き)たかる(う)」とする。(『中等文法』では標準的口語として認めていないが、「ぬ」をつける「よから」があるとなれば、この場合も、未然形に二つの形「よから」「よかる」があることになる。)

これまで形容詞の音便(「ございます」「存じます」につづける場合に用いる。)は、連用形の語尾の「く」が「う」になるという説明で、活用表の組織はくずれなかったのであるが、現代かなづかいでは、「あかい・あかく・あかう」を、「あかい・あかく・あこう」と書くように、いわゆる語幹の部分にまで変化の及ぶ場合があるので、これを一つの表に示そうとすれば、かえって複雑なものとなる。いま、表はともかくとして一般的に述べれば、いわゆる語幹の末にア列のカガサタナパマラワをもつもの、例えば「あかい」「ながい」「あさい」「かたい」「おさない」「すっぱい」「あまい」「こわい」等(助動詞「たい」もこれに準ずる。)の音便形は、「あこう」「なこう」「あそう」「かとう」「おさのう」「すっぱう」「あもう」「こおう」等(「(行き)とう」となり、同じくイ列のイキシジをもつもの、例えば「かわいい」「大きい」「正しい」「ひもじい」等(助動詞「らしい」もこれに準ずる。)の音便形は、「かわゆう」「大きゅう」「正しいゅう」「ひもじゅう」等(「聞える」らしゅう)となるのである。(ウ列オ列のものは、「やすう」「明るう」「よう」「かしこう」等のように、これまでどおりである。エ列のものは、口語には用いられない。)ただ、これまで語幹のうちと認められていた部分を、形が変化するからといって活用語

尾と認めることは、送りがな規則の立て方にも影響が及び、また活用表をいたずらに複雑にするもの（ア列九行、イ列四行、ウ列、オ列の十五種になる。）として、にわかに賛成することはできない。

形容動詞（静かだ・上品だ）等の活用語尾「だ」と助動詞「だ」とは、未然形の「だら（う）」を「だろ（う）」に改めればよい。「です」も、未然形の「でせ（う）」を「でしよ（う）」に改めればよい。

右にあげた以外の助動詞では、「た」は、未然形の「たら（う）」を「たる（う）」（「行ったらう」「見たらう」とすることになる。「ます」は、未然形に、「ん」をつける「ませ」と、「う」をつける「ましよ」（「ありましよ」「できましよ」との二つの形を認める必要がある。

推量や意志を表わす助動詞の「よう」については、問題はまったくおこらない。（読むために「キヨオ」「シヨオ」と「キヨオ」「シヨオ」等とを区別する工夫が大切である。また、サ行変格活用にもすびついたのは、「（運動）しよう」であつて「（運動）しよう」ではない。）「う」は、これまでどおりの形であるが、その接続において、活用語のオ列の語尾をもつ未然形につくと説明する必要が生じたことは、前に述べたとおりである。（しかし実は、「書こう」「よかる

う」等の「う」は、長音を表記する一部分にすぎないのであつて、「書こ」と「う」、「よかるう」と「う」等の二部分に分析することは、論理的には適當でない。分析することができないとすれば、「書こう」「よかるう」の形の全体を、「書く」「よい」の一つの活用形と認めるべきであらうか。これは、形容詞の音便形とともに、活用あるいは活用形という基本的な觀念を通じて、文法論の上に深く反省すべき諸種の問題のいとぐちをなしているものと考えられる。）

現代かなづかいの当面の対象は、現代の口語文であつて、古典や文語文は、いちおうその制約のそとにあるが、おりおり文語的な表現が口語文の中に用いられることがあつて、場合によつてはその書き方が問題になる。そのいちじるしいのは、「べき」をつける場合の、もとのハ行の動詞である。例えば、「憂ふべき」「考ふべき」「教ふべき」「行ふべき」等は「ウリヨオベキ」「カンゴオベキ」「オシウベキ」と発音するのを現代における文語の読み方として標準的なものとすれば、かながきでは「うりょうべき」「かんこうべき」「おしうべき」「おこのうべき」と書くことになるであらう。ただ、別項の『官庁用語を平易にする標準』のように、「べき」は「憂える」「考える」「教える」という形につくのを標準とすれば、したがつて「行ふべき」も口語的に「オコナ

ウベキ」と発音され、「おこなうべき」と書かれることになって、文語脈がはいるために語幹にまで及ぼされる変化を、いちおうは抑えることができるであろう。「行うて」「副うて」のような、いわゆるウ音便を用いた表現は、別に述べられているとおり標準的とは考えられないが、もし口語文の中にまじえて書くとするば、「おこのうて」「そうて」とすべきはもちろんである。（『官庁用語を平易にする標準』では、「問ふ」「請ふ」二語については、音便形を認めて、「問うて（た）」「請うて（た）」を用いることにしてある。）

かように文法と現代かなづかいとの関係を見てくると、これまでかなづかいのために費された部分については、まったく力をさく必要がなくなっているのである。ただ、あらたに多少複雑な観を示すのは、形容詞の音便についての説明の方法と、文語脈取入れの問題とであるが、前者は、いちおう説明としては活用表の組織から除けばすむであろう。後者は、いっそう深く文体自身にかかわる問題として、標準的語音をどう認めるか、どういう表現を標準的と定めるか、文法的説明よりもむしろそのものの解決が要求されるべきである。

口語動詞の活用表

種類	行	例語	語幹	未然	連用	終止	連体	假定	命令	備考
五	カ	書	か	こ	き	く	く	け	け	未然形のア列のものは、「ない」「れる」「せる」など、オ列のものは、「う」をとまう形。
ガ	泳	ぐ	およ	ご	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ	
サ	押	す	お	そ	し	す	す	せ	せ	

段 一 上	用 活
ナ タ ザ ガ カ ア	ワ ラ マ バ ナ タ
似る 落ちる 恥じる 案じる 過ぎる 生きる 居る 悔いる 強いる	買う 乗る 読む 飛ぶ 死ぬ 打つ
(に) お は 案 す い (い) く し	か の よ と し う
に ち じ ぎ き い	おわ ろ ら も ま ぼ ば の な と た
に ち じ ぎ き い	つ い っ り ん み ん び ん に っ ち
に ち る じ る ぎ る き る い る	う る む ぶ ぬ っ
に ち る じ る ぎ る き る い る	う る む ぶ ぬ っ
に ち れ じ れ ぎ れ き れ い れ	え れ め べ ね て
に ち じ ぎ き い ろ ち り じ り ぎ り き り い (よ) (よ) (よ) (よ) (よ)	え れ め べ ね て

用 活 段 一 下	用 活
ラ マ バ ハ ナ タ ザ サ ガ カ ア	ラ マ バ ハ
恐れる 改める 調べる 経る 重ねる 出る 捨てる 混ぜる 寄せる 告げる 受ける 植える 越える 考える 得る	借りる 試みる 浴びる 干る
おそ あらた しら (へ) (かさ) (で) す ま よ つ う う こ かんが (え)	か ころ あ (ひ)
れ め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	り み び ひ
れ め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	り み び ひ
れる める べる へる ねる での てる ぜる せる げる ける える	りる みる びる ひる
れる める べる へる ねる での てる ぜる せる げる ける える	りる みる びる ひる
れ め れ べ れ へ れ ね れ だ れ て れ ぜ れ せ れ げ れ け れ え れ	り れ み れ び れ ひ れ
れ ろ め ろ べ ろ へ ろ ね ろ だ ろ て ろ ぜ ろ せ ろ げ ろ け ろ え ろ (よ)	り ろ み ろ び ろ ひ ろ (よ)

口語形容詞の活用表

カ行変格	来る	(来)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ行変格	勉強する	勉強	させし	し	する	する	すれ	しろ (せよ)

口語形容動詞の活用表

語例	語幹	未然	連用	終止	連体	假定	命令	備考
長い 久しい	なが ひさし	かる (から)	かつ く	い	い	けれ	○	音が、長ア、ウ列、イ、オ、 列、音、列、音、の、 形、の、も、列、の、も、 は、の、長、の、末
語例	語幹	未然	連用	終止	連体	假定	命令	
静かだ 上品だ	静か 上品	だろ	でだ にだ	だ	な	なら	○	

口語助動詞の活用表

型用活詞動容形	型用活詞容形	型用活詞動	種類
ようだ (伝聞) そうだ (様態) そうだ	らしい たい ない	られる れる させる せる	語
			接続
ようだろ ○ そうだろ	○ たかる なかる	られ れ させ せ	未然
<div> よう よう よう そう そう そう </div> だ に で だ に で だ	<div> らし た な </div> く か か か か か	<div> られ れ させ せ </div>	連用
ようだ そうだ そうだ	らしい たい ない	られる れる させる せる	終止
ような ○ そうな	らしい たい ない	られる れる させる せる	連体
ようなら ○ そうなら	○ たけれ なけれ	られ れ させ せ	假定
○ ○ ○	○ ○ ○	られろ れろ させろ せろ	命令
	らしゅう 音便形 とう 音便形		備考

もなの いの変語 の化形	型用活殊特	
まよう い　　う （カオ イ列変 変列の のエを 未列除 然とく 然）	です　　た　　ます　　ぬ	だ
○　○　○	で　　まし　　ませ し　　た　　せ よ　　ろ　　よ	だろ
○　○　○	で　　○　　まし　　ず し　　○　　し　　ず	で　　だ だ　　っ
○　○　○	です　　た　　ます　　ぬ （ん）	だ
まよう い　　う	（です　　た　　ます　　ぬ （ん）	（な）
（まい）（よう）（う）	○　　た　　ます　　ね す　　れ	なら
○　○　○	○　　○　　（まし　　○ せ　　し）	○

二 現代かなづかいの生かし方

(昭和二十二年八月)

文部省内国語問題研究会

単行本「新しい文書の手びき」(昭和二十二年八月刊)の第五章として書かれたもの。四つ仮名とオ列の長音については、語例を網羅して特に詳しく解説している。

一 現代かなづかいのできたわけ

われわれが文書をかく場合、普通に用いる形式は漢字かなまじり文といわれています。漢字とかなとのうち、漢字については、前の章でその使い方を述べましたから、この章では、かなの使い方について少し説明しましょう。

これから当用漢字表にある漢字だけを使って文書を書くことになる、いきおい、今まで漢字で書いていた言葉も、かなを用いて書かなければならない場合がでてきます。また、文字の用法の改革は文字の面だけにとどまるのではなく、漢字を無制限に使うことが許されないため、いきおい、むずかしい表現ができなくなり、やさしいことばを選んで文書がつづ

られるようになるのはいうまでもありません。そのためにも、また、文書のなかにながきの部分がふえてくるものと考えられます。かなづかいの問題は、いままでとは比較にならないほど重要な意味をもってきたのです。このような時にあって、いままでのかなづかいにかわって、現代かなづかいが制定され、実行にうつされました。では、何のためにそのような処置がとられたのでしょうか。かなの使い方の変革のうちにみられる精神は、同時に、そのかなを用いて文書を書く人々の心構の問題ともかわりがあると考えますから、簡単にその点にもふれながら、筆をすすめて行きましょう。

かなづかいには歴史的かなづかいと表音的かなづかいとの二つの型があつて、いままでのかなづかいには前者に、現代かなづかいには後者に属するということはいうまでもないことです。が、歴史的かなづかいもそのもとを正せば表音的かなづかいであつたのです。年がたつにつれて、ことばの音が変化して行つたのに、そのことばをかなであらわす表記形式がもとのままであつたため、ことばと表記形式との間にへだたりができて、ちょうど、身だけはのびたのに着物は四つ身の着物そのままといった形になつたのです。千年も前の表記形式で現代語をあらわそうとしたところに本質的に無理があつたのです。それがまた、教育上の大きな負担にもなつて、漢字を

多く教えることとあいまって、漢字やかなづかいを教えることと、その言いかえとに時間をとって、事物そのものの内容の教育にまで行かないうらみがありました。文字使用の平易化ということがいつも声を大にして叫ばれたのも主としてこの理由からです。ただに教育の面だけではなく、ひろく社会生活においても、今までのかなづかいが十分統一に行われていたわけではなく、その混乱と一般人にとっての困難さは、社会生活の能率をいちじるしく低下させていたのが、今までのいつわりのない状況だったのです。

現代かなづかいはこのような困難をのぞくために制定されたものですが、とくに、今までの漢字のかげにかくれて、露出していなかった困難が当用漢字の制定・実行にもなつて、大きくわれわれの前におどり出してきた時、現代かなづかいの必要性はとみに加わったといつて過言ではないと思います。では、現代かなづかいはどんな内容のものなのでしょう。か。

二 現代語音とちがう点

現代かなづかいは表音的かなづかいであるといわれています。現代かなづかいは、大体、現代語音にもとづいて、現代

語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。

と述べられています。それではこのかなづかいは現代語音をそのままあらわしているのかというと、けつしてそうではないのです。現代語音をそのままあらわしたものとしては、発音符号が考えられます。それらは、正字法の一つとしてのかなづかいは性質のことなつたものです。現代かなづかいは傾向として表音的ではありませんが、あらわそうとすることばの音韻と、それをあらわす文字として採りあげられたかなとの間にはある約束が介在するのです。その約束が現代かなづかひの内容なのです。約束である以上、その約束を知らなければ、—— またこれを習わなければ、使うことはできません。ところが、現代かなづかひの条文のいちいち、旧かなづかひとどのようにちがうかという点を明らかにしようという意図からして、説明がややこみいつています。その条文は巻末に収めてありますから、それを見ていただくことにしますが、それを見やすいように一つの表にまとめてみると、次のようになります。

ゾ オ	ソ オ	ゴ オ	コ オ	オ オ	ユ ウ	オ	エ	オ	ウ	イ	ワ	ズ	ジ	ガ	カ	オ	エ	イ	発 音
ぞ う	そ う	ご う	こ う	お う	ゆ う	お	え	お	う	い	わ	ず	じ	が	か	お	え	い	新 か な づ か い
ざ う	さ う	ご う	か う	あ う	い う	ほ	へ	ふ	ふ	ひ	は	づ	ぢ	ぐ わ	く わ	を	ゑ	ゐ	旧 か な づ か い
ざ ふ	さ ふ	ご う	く わ	わ う	い ふ														
一 四	一 四	一 三	一 三	一 三	一 二	一 二	一 二	一 二	一 二	一 二	一 二	一 三	一 三	一 二	一 二	一 一	一 一	一 一	細 則
言ふはいう(細則第六参照) おほ・こほ・とほ・ほほ等はおお・ こお・とお・ほお(細則第九参照)						助詞のへは本則としてへ 二語の連合、同音の連呼によるぢづ はぢづ なお「注意一」参照 助詞のはは本則としては													注 助詞をはを 「注意一」参照 意

シ ョ オ	ギ ョ オ	キ ョ オ	リ ユ ウ	ビ ユ ウ	ヒ ユ ウ	ニ ユ ウ	チ ユ ウ	ジュ ウ	シ ユ ウ	ギ ユ ウ	キ ユ ウ	ロ オ	ヨ オ	モ オ	ボ オ	ポ オ	ホ オ	ノ オ	ド オ	ト オ
し ょ う	ぎ ょ う	き ょ う	り ゅ う	び ゅ う	ひ ゅ う	に ゅ う	ち ゅ う	じ ゅ う	し ゅ う	ぎ ゅ う	き ゅ う	ろ う	よ う	も う	ぼ う	ぽ う	ほ う	の う	ど う	と う
し ゃ う	ぎ ゃ う	き ゃ う	り う	び う	ひ う	に う	ち う	じ う	し う	ぎ う	き う	ら う	え う	ま う	ば う	ぱ う	は う	な う	だ う	た う
せ う	げ う	け う	り ふ			に ふ		じ ふ	し ふ		き ふ	ら ふ	え う		ば ふ	は ふ	ほ ふ	な ふ	た ふ	
せ ふ	げ ふ	け ふ						ぢ ゅ う							ぼ ふ		ほ ふ	の ふ		
二 八	二 七	二 七	二 六	二 五	二 五	二 四	二 三	二 二	二 二	二 一	二 一	二 〇	一 九	一 九	一 八	一 七	一 七	一 七	一 六	一 五

を残します。また「つづく」のように同じ音が一語のなかで連呼される場合にも上の文字との関係から「づ」を残します。

以上の三項のうち、一はその約束がひろいもの、それにたいして一のただし書きと、二と三とはややかぎられた場合の約束です。そのほか、一語として現代音と合致しないものに次の二項があります。

四 助詞を・へ・はの三つのものは、現代語音ではオ・エ・ワですが、現代かなづかいでは、を・へ・はとしたのです。これを、お・え・わとするのは、一般社会の心理を考慮するとき、あまりにも行きすぎた処置ではあるまいか、現段階ではまだ、を・へ・はを残す方が自然ではあるまいか、との意見が強く主張されたことと、助詞「を」「お」とすると語頭の「お」との区別がややむずかしいといういろいろな点から考えあわせて、このように定められたのです。

五 「言う」という語は、現代語音ユーですから、現代かなづかいでは、「ゆう」とすべきですが、とくにこの一語だけは「いう」とかく約束になりました。この動詞が、いわない、いいます、いえば、いって、などのように活用しますので、その終止形を「いう」と

かく約束にしますと、統一的に説明ができるということと、「ぢ」「づ」を残したときと同じように、他の活用形との関係がつよく意識されるというところに、「いう」の残された理由があります。

以上の五つの項目をよく頭にいられたと、現代かなづかいの大きな約束——現代かなづかいの条文にあらわれているかぎりの約束は理解できたことになります。

が、さてこの約束をもとにして、一々のことばを書こうとすると、疑問の点が出てくると考えられます。次章では予想されるそれらの疑点について考えて行くことにしましょう。

3 「じ」「ぢ」・「ず」「づ」とオ列の長音

現代かなづかいを使う上で、予想される疑点は、主としてことばのなかで、「じ」をつかうか、「ぢ」をつかうか、「ず」をつかうか、「づ」をつかうかという問題とオ列の長音についての問題であると考えますから、その二項についてやや詳しく述べてみましょう。その他の点では、

助詞のはは、はと書くことを本則とする。

という例外を、助詞「は」が単独につかわれる場合だけに考えて、

では、ては、には、とは、のは、からは、よりは、ので

は、たりは、こそは、までは、ばかりは、だけは、ほどは、ぐらいは、などは、あるいは、もしくは、おそらくは、ねがわくは、こいねがわくは、おしむらくは、または、さては、すこしは、いずれは、については、：

などのように、「は」が他の語とつづけてつかわれるときは、「わ」でよいのではないかと考える人がおうおうありますが、これらの場合も、もちろん、「は」を用いるのです。ただし、以前から「わ」をつかっていた、

いやだわ、来るわ来るわ、食うわ食うわ、

の類は、もとのまま「わ」をつかうということを、念のために申し添えるにとどめておきます。さて、「じ・ぢ・ず・づ」とオ列長音については、すこし詳しく説明する必要がありますが、まずから、

第一「ぢ」を書くもの

第二「づ」を書くもの

第三「じ」「ず」を書くもの

第四「お」「おお」「おう」

の順で表示してみましょう。

(漢字の右側に×印をつけたものは、当用漢字表にない漢字です。)

第一「ぢ」を書くもの

一、二語連合の「ぢ」

○ち(血)

はなぢ

清

いきち
なまち
ふるち

○ちえ(智慧××)

いれぢえ

さしぢえ

さるぢえ

わるぢえ

○ちか(近)

みぢか

まぢか

はしぢか

てぢか

○ちかい(近)

けちかい

てぢかい

まぢかい

「じ」みじかい(短)

○ちから(力)

うでぢから

くそぢから

そこぢから

たぢから(手)

ばかぢから

たぢから(税)

○ちしゃ(菰萱××)

あかぢしゃ

こうやぢしゃ

しろぢしゃ

○ちち(乳)

からぢち

もらいぢち

じ

そえじ
ほそじ
むなじ

○ちゃ(茶)

はぢゃ

清

せんちゃ
まっちゃ
うぐいすちゃ
しらちゃ

○ちゃや(茶屋)

かけぢゃや
たてばぢゃや

はぢゃや

ひきてぢゃや

まちあいぢゃや

みずぢゃや

○ちゃわん(茶碗)^x

うがいぢゃわん

コーヒーぢゃわん

ごろはぢぢゃわん

ちゃづけぢゃわん

めしぢゃわん

ゆのみぢゃわん

○ちようちん(提灯)^x

おだわらぢようちん

かごぢようちん

ぎふぢようちん

たかはりぢようちん

つりぢようちん

はこぢようちん

ふぐぢようちん

ほおずきぢようちん

ゆみはりぢようちん

○ちようし(調子)

ことばぢようし

清
うわっちようし
ほんちようし

○ちらし(散)

もんぢらし

○ちりめん(縮緬)^x

ひぢりめん

くろちりめん

しろちりめん

はぎちりめん

たんどちりめん

ろちりめん

二連呼の「ぢ」

ちぢかむ

ちぢこまる

ちぢまる

ちぢみ

ちぢむ

次のような場合は連呼とはいえないので、前のかには関係なくかきます。

「ち」につづける「じ」

いちじ(伊知地)^x

いちじく

いちじるしい

うちじに

ちじく(地軸)

ちじん(知人)

第二「づ」を書くもの

一、二語連合の「づ」

○つ「津」

つづうらうら

ゆうぜんちりめん

ちぢめる

ちぢらす

ちぢれる

ちぢか

ちりぢりばらばら

にちじ(日時)

みちじるし(道標)

けんちじ(知事)

「じ」につづける「ち」

じちんさい

ひとじち

じち(自治)

「ず」ときわず

○つえ(杖)^x

いきづえ

うづえ

かせづえ

こんごうづえ

そばづえ

つらづえ

はとづえ

ほおづえ

ゆんづえ

○つか(束・柄)

こづか

かじづか(梶柄)^x

ちづか(千束)

ゆづか(弓束)

清(しらつかぐみ)

○つか(塚)^x

あおづか

いちりづか

かいづか

くびづか

こいづか

ちりづか

ひよくづか

ふでづか

ふるづか

ありづか

○つかい(使)

あまはせづかい

いきづかい

おうぎづかい

かなづかい

かねづかい

きづかい

こづかいせん

こづかいさん

ことばづかい

ことりづかい

こまづかい

したづかい

ぜにづかい

たちづかい

(刀)

ひとづかい

ふでづかい

ふだんづかい

むだづかい

まづかい(間)

みずづかい

もじづかい

きづかい

きづかう

きづかわしい

○つかえ(仕)

みやづかえ

しもづかえ

○つかさ(司)

のづかさ

みさとづかさ

みやづかさ

○つかみ

おおづかみ

てづかみ

わしづかみ

○つかれ(疲)

きづかれ

たびづかれ

○つき(月)

ありあけつき

いまちつき

おぼろつき

かたわれつき

たちまちつき

ねまちつき

みかつき

もちつき

ゆうつき

ゆみはりつき

よいつき

ほしづきよ

うつき

みなづき

ふつき

はつき

かんなづき

うめみづき

にいづき
うるうづき

清

さつき
ながつき
しもつき

うみづき

うまれづき

つきづき

にくづき (肉月)

○つき (突)

いしづき

つのづきあい

○つき (搗^x)

しちぶづき

ちんづき

○つき (附)

おくさまづき

みやさまづき

じょうけんづき

ぞうさくづき

ちかづき

かおつき

けんしょうつき

じさんきんつき

にくつきがよい

ほけんつき

わりましきんつき

清

○つきあい

きんじよづきあい

しんるいづきあい

つのづきあい

ともだちづきあい

ひとづきあい

○つく

あかづく

いきづく

いきおいづく

えんづく

かたづく

かつきづく

きづく

げんきづく

ちかづく

ちからづく

ちようしづく

ねづく

もとづく

かんづく

どくづく

餌^xづく

「ず」

いたづく

うづく

うすづく

うなづく

えずく (嘔吐^x)

かしづく

かづく

きづく (築)

けつまづく

つまづく

ぬかづく

みずくかばね

うでづくで

なかんづく

○つくえ (机)

きようづくえ

こうづくえ (香机)

こづくえ

ながづくえ

ぬりづくえ

ふづくえ

ふみづくえ

○つくよ (月夜)

あさづくよ

ほしづくよ

ゆうづくよ

○つくり

あらづくり

いかものづくり

いけづくり

いちやづくり

いとづくり

かんづくり (寒)

こづくり
さかづくり
したづくり
てづくり
みづくり
わかづくり
こがねづくり
やづくり
とのづくり
かすがづくり
しんでんづくり
すきやづくり
すみよしづくり
てんちこんげんの
みやづくり
やつむねづくり
ながれづくり
はふづくり
せいようづくり
にかいづくり
れんがづくり

にわづくり

○つくし

こころづくし

ちからづくし

かくしげいづくし

くにづくし

ないないづくし

はなづくし

字づくし

はやいものづくし

おそいものづくし

○つくる

つれなしづくる

○つくろい

したづくろい

はねづくろい

はづくろい

みづくろい

○つけ(漬)^x

あさづけ

あちらづけ

アルコールづけ

あわづけ

いちやづけ

うめづけ

かすづけ

からしづけ

さけづけ

さとうづけ

しばづけ

しんづけ

しおづけ

すづけ

せんまいづけ

たくわんづけ

ちゃづけ

ならづけ

ぬかづけ

ふるづけ

べったらづけ

まるづけ

みそづけ

ゆづけ

わさびづけ

○つけ(附)

あとづけ

あとかたづけ

いちづけ

うらづけ

かちづけ

かどづけ

きそづけ

きづけ(文部省気附)

くちづけ

こづけ

こころづけ

ことづけ

さくづけ

しなづけ

ちようづけ(丁)

なづけおや

ひづけ(日附)

ふしづけ(節)

むこうづけ
わきづけ
ばんづけ
かさづけ
かんむりづけ
まえくづけ
みかさづけ
ものはづけ
くぎづけ
にかわづけ
のりづけ
はんだづけ
ろうづけ
「ずけ」
いいなづけ
○つける(附)
あとづける
いきおいづける
うらづける
えんづける
かたづける

かっきづける
かちづける
きそづける
げんきづける
ちかづける
ちからづける
とくちようづける
とりかたづける
なづける(名)
ことづける
ことづかる
「ずける」
あずける
さずける
てなづける
かずける
○つた(薦)
うるしづた
おにづた
きづた
ひめづた

ふゆづた
○つたう
あまづたう
こづたう
○つたい(伝)
いそづたい
かわづたい
きしづたい
そぼづたい
にわづたい
はまづたい
とびいしづたい
○つたえ(伝)
くちづたえ
ひとづたえ
○つち(槌)
あいづち
いしづち
うづち
かなづち
きづち

こづち
うちでのこづち
さいづち
蒸気づち
「ずち」
いのこずち(牛膝)
○つつ(砲)
おおつつ
ほつつ
清(ささげつつ)
○つつ(筒)
いづつ
うけづつ
きようづつ
すいづつ
たけづつ
ちゃづつ
つついづつ
てづつ(手)
はなづつ
ふでづつ

○つて

くちづて

ことづて

ひとつて

○つと

いえづと

わらづと

さげづと

○つつみ(包)

うわづつみ

かねづつみ

かみづつみ

こづつみ

こもづつみ

たけのかわづつみ

ふろしきづつみ

わらづつみ

○つつみ(鼓^x)

したづつみ

はらづつみ

○つとめ(勤)

おくづとめ

かよいづとめ

きゃくづとめ

そばづとめ

やくしよづとめ

かいしゃづとめ

○つな(綱)

いかりづな

おおづな

毛づな

竹づな

ともづな

はづな

はなづな

ひきづな

ほづな

「ずな」

きずな

たずな

○つの(角)

ふくろづの

ほそづの

わかづの

○つま(妻)

おもいづま

かくしづま

こいづま

しのびづま

とおづま

にいづま

はしづま

ひとづま

「ずま」

いなづま

きりずま

○つま(棲^x)

かさねづま

きづま

こづま

そでづま

たてづま

ひだりづま

○つまり(詰)

きづまり

すんづまり

てづまり

どんづまり

ふんづまり

ゆきづまり

○つまる(詰)

いきづまる(息)

てづまる

ゆきづまる

「ずまる」

かんずまります

○つみ(積)

うわづみ

くるまづみ

したづみ

そこづみ

なかづみ

にづみ

ふなづみ

やまづみ

「ずみ」

やまづみ「山祇」[×]

○つめ(爪)[×]

かいづめ

ことづめ

さかづめ

なまづめ

ふかづめ

「ずめ」

けずめ

ひずめ

○つめ(詰)

はしづめ

きたづめ

にしづめ

ひがしづめ

みなみづめ

くにづめ

じょうづめ

ほんしょうづめ

ほんでんづめ

「ずめ」

さしづめ

○つめ(詰)

いしこづめ

おりづめ

かんづめ

ぎゅうづめ

ごづめ

こおりづめ

じゅうづめ

せっちんづめ

たるづめ

てづめ

ちようづめ

はこづめ

びんづめ

りづめ

おおづめ

字づめ

ひざづめだんぱん

○つもり(積)

あらづもり

木づもり

こころづもり

ねづもり(値)

○つゆ(露・梅雨)

はぎのしたづゆ

からづゆ

○つよ(強)

としづよ

○つよい(強)

がまんづよい

きづよい

こころづよい

しんぼうづよい

ちからづよい

てづよい

ねづよい

○つら(面)

あかづら

いもづら

うまづら

こづら

こづらにくい

じゅうばこづら

とぼけづら

ばかづら

ひげづら

ぶっちようづら

ほえづら

清

なきづら

ふくれっつら

むこうっつら

はなっつら

はなづら

うみづら

たづら

のづら

○つらい(辛)

ききづらい

しづらい

みづらい

ゆきづらい

○つり(釣)^x

いっぽんづり

おきづり

かけづり

からづり

さおづり

てづり

ながしづり

なわづり

ともづり

よづり

○つる(鶴)^x

おりづる

せんばづる

たんちようづる

なべづる

まなづる

○つる(弦)

ゆんづる

さげづる

○つる(蔓)^x

いもづる

てづる

ふじづる

○つれ(連)

おおぜいづれ

おやこづれ

おんなづれ

ふうふづれ

ふたりづれ

みちづれ

うまはうまづれ

うしはうしづれ

下女づれ

御身づれ

清

すか
まだそのつれをぬか

ニ連呼の「づ」

つづき

じつづき

てつづき

ひきつづき

つづける

つづけざま

いつづけ

つづまやか

つづまる

つづみ

おおつづみ

こつづみ

したつづみ

(づつみ)

はらつづみ

(づつみ)

つづめる

つづら

あおつづら

つづらおり

つづらふじ

つづり

つづりかた

つづる

つづれ

つづれにしき

つづ(十)

つくづく

つれづれ

つねづね

つきづきしい

つきづき(月々)

つづうらうら(津々)

「つ」につづける「ず」

くつずれ

くつずみ

べつずり

こつずい(骨髓)

「ず」につづける「つ」

きずつく

ずつう

きずつける

ひとつずつ

てずつ (拙)

ゆうずつ

へずつ (平秩一人名)

「ず」につづける「づ」

みずづかい

「す」につづける「づ」

すづけ

かすづけ

第三「じ」「ず」を書くもの

「これまで「じ」「ず」を書いてきたもの

いちじく

いちじるしい

ニ語頭における「じ」「ず」

じめん

じれったい

じじい

じんちようげ

じかに

じっと

じきに

ずうずうしい

じっこん

ずきん

じくじ (忸怩×)

ずく

じゅうばこ

ずがいこつ

じょうぶ

ずきん

ずばぬける

ずたずた

ずけずけ

三分析しがたい語中の「じ」「ず」

あじ (味・鰯×)

あじさい

いじらしい

いじる

うじ (氏)

えこじ

おじけ (る)

かじ (楫)

けじめ

げじげじ

けむくじやら

くじら

こうじ (麴×)

しめじ (茸×)

すじ (筋)

すじりもじり

ずし (厨子×)

ずぼし

とじ (る)

どじをふむ

ねじ (る)

はじ (る)

もみじ

ひじ (土・肘×)

ふじ (藤×)

もじる

よじる

うずたかい

うず うずら

あずかる (あずける)

あずき

あずさ

いずこ

いずのおたけび

いづれ
うずめる(もる)
かずく
かずら
くず(屑)
くずれる
けずる
さずける(かる)
しずか
しずのおだまき
しむ
しみず
おしまずき
たずねる
たずき
たずさえる
なずき(脳)
なずな
なずむ

にわたずみ
のほうず
はずかしい
へずる
はずす(れる)
まずい
まずしい
みず
むずかしい
むずかる
めずらしい
もくず
もづく
ゆずる
よろず
わずか
わずらう
なまず

四、二部分にわけて考えることのできる語の、

後部のはじめの「じ」「ず」

1 字音の複合によるもの

イ 連声(連濁)

知(げじ) 智(てんじてんのう)

中(こうじゅう、しんじゅう、れんじゅう、ろうじ

ゅう、このじゅう)

頭(まんじゅう) 長(にんじょう人長) 朝(じんじ

よう晨朝)

都(そうずー俊寛そうず)

通(ぐずう(弘ー) じんずう、じんずうりき、ゆう

ずう)

ロ 語頭でチツのほかにジズの音をもつもの(漢音チ
呉音ヂの類)が複合しているもの

地(いじ、いきじ、いくじ、きじ、きぬじ、したじ、

でんじ、ほんじ、へんじ、おびじ) てんち、し

ゃくち、

治(たいじ、とうじ、りょうじ、もみりょうじ、め

いじ) じち

帖(あきはぎじょう、ほうじょうじたて) てちよう

沈(じんこう、じんちようげ) ふちん

着(しゅうじゃく、あいじゃく、むとんじゃく) ふ

ちやく

直(しょうじき、こうじき、げじき) せいちよく

重(にじゅう、げんじゅう、けいじゅう、さげじゅ

う) けいちよう

豆(だいず、いず) えんどう

頭(ちようず、ごずめず、りゅうず、ひりようず)

ばんとう

図(あいず、さしず、せいず、ちず) いと きと

2 後部のものがジズ濁音として独立の用法をもつもの

ずく(豆蔻[×]) (くさずく、しょうずく、にくずく

ずく(木菟[×]) (みみずく、このはずく

ずきん(頭巾[×]) (あおずきん、おこそずきん

じゅう(重) (さげじゅう、すぎじゅう

じ(柱) (ことじ(琴柱)

3 普通に二語に切りはなして考えにくいもの、(後部

のものに独立した用法が認められるか否かにかかわら

ず、前部のものが現代語として独立した用法をもたな

いので)

いたずく うすずく、うなずく えずく(嘔吐[×]) か

しずく きずく(築) つまずく ひざまずく ぬか
ずく なかんずく たずな きずな けずめ ひず
め いなずま さかずき こずみ(木屑[×])

4 後部のものが独立の用法をもたないもの

イ 独立の語形がないもの

おやじ おじ おおじ わらじ(草鞋[×]) たず(田

鶴[×]) たまらず(玉章)

ロ 接尾語としてだけ用いられるもの

(じゅう) (中) せかいじゅう 一日じゅう

(ずから) らいねんじゅう せんだつてじゅう

みずから みみずから

うでずくで おもしろずくで かねず

(ずくで)

くで ぜにずくで

(ずくめ) けっこうずくめ おもしろずくめ

(ずつ) ひとつずつ

ハ 複合語の成分としてだけ用いられるもの

(じ路) あずまじ いえじ うまやじ うみじ

うみつじ おうみじ おかじ かけじ

かよいじ かわじ きそじ くもじ く

がじ こうじ くまじ しおじ せき

じ ただじ たびじ ながじ なみじ
のじ つくしじ はまじ はゆまじ ひろ
こうじ ふなじ よかりじ まさごじ
みなとじ みやこじ みやじ やまじ
やまとじ やみじ ゆめじ よきじ
わかれじ

(じ乳) そえじ ほそじ むなじ

ニ 語源の明らかに意識されないもの

かたず むしず さかづき いのこづち くちづつ
てずつ ゆうずつ てずま あますら みすら び
んすら おとずれる

五 同じ語でツズ両様の発音のあるものズは

「ず」

みおつくし	なつける
みおづくし	なずける (てなずける)
むつかしい	みいつ 一つのおたけび
むずかしい	みいず いずのおたけび

第四 「お」「おう」「おお」

一 ア列音につづくオ (アオ、カオ、サオの類)
はすべて「お」

イ 旧かなづかいで「を」「ほ」と書いていたもの
あお、かお、さお、みさお、みおつくし……等
ロ 旧かなづかいで「ふ」と書いたもの

あおい (葵) × あおぐ (仰) × あおる (煽) × あお
り (煽・障泥) × あおむく × あおむける × あおむき
あおむけ (仰) × たおす × たおれる × いしゃだおし
みかけだおし × くだおす × きだおれ × くだおれ
けいかくだおれ × ゆきだおれ (倒)

二、オ列音につづくオ (オオ、コオ、ソオ、キョ
オ、シヨオの類)

イ 旧かなづかいでア列またはオ列のかなに「う」
または「ふ」をつづけたもの (あう、あふ、かう、
かふ、こう、こふの類) は、すべてオ列のかなに
「う」をつけて書きます。

おうむ、おうぎ かおう (買はう) × こうじ (麴)
こうばしい (香) 書こう、むこう (向) じゅう

そう(重曹)^x そうろう(候) ぞうきん きの

う(昨日) きょう(今日) ほうる(放)

ほうき(箒)^x

口 旧かなづかいでオ列のかなに「ほ」「を」をつづ
けたもの(あを、なほの類)は、オ列のかなに「う」
をつけて書きます。

直衣ナホシ——のうし 青梅棉^x アヲメ——お

うめわた 素襖^x スアヲ——すおう 赤穂義

士 アカホ——あこうぎし

ハ 旧かなづかいでオ列のかなに「ほ」「を」をつづ
けたもの(おほ、こほ、とほ、とをの類)はすべて
オ列のかなに「お」をつづけて書きます。

いきどおる いとおしい

おおい(多) おお……

おおきい、おおきな おおいに(大) おお……

おおぜい、おおもて、おおかぜ等

おおかた おおげさ おおどか、おおっぴら お

おまか、おおよそ、おおらか、おおるか

おおす(生) おおせ(仰) おおせる(課)

しおおせる(了)

おおい(被) おおう

おおかみ(狼)^x おおやけ(公)

こおり(氷・郡) うすごおり あつごおり

こおろぎ

そおず(案山子)

とお(十) とおか にひゃくとおか

とおい(遠) とおのみかど えんどお まどお

まちどお とおあさ とおえん とおざかる とお

ざける とおのく……

とおす(通)

とおし ありどおし かぜとおし すどおし せん

まいどおし せんごくどおし しどおし

とおる

とおり すどおり 右のとおり くぶどおり

ほお(頬)^x ほおえむ ほおかぶり ほおげた

ほおばね ほおづえ ほおひげ ほおばる ほおずり ほおな

めずり ほおべに「ホウ(方)」

ほおのき ほおば

ほおじろ

ほおずき うみほおずき せんなりほおずき

コウリ(梱)^x
チヨウロギ

ほのお(炎)

もよおす もよおし(催) 「キノウ(昨日)」

「注意」 旧かなづかいで「ふ」と書いたものは

ア列音につづいてオとよまれるもの「お」

あふぐ——あおぐ

ア列オ列のかなにつづいてオ列長音によれるもの

「う」 あふぎ——おうぎ

ウとよまれるもの「う」 あふ——あう

そのほか、漢字のあてかたによっても、またことばの音のちがいによっても、表記形式にちがいを生じます。

漢字のあて方によるちがい

おおへい(大柄) おおまがとき(大禍時)

おうへい(横柄) おうまがとき(逢魔時)

おおよう(大様) こおなご(小女子)

おうよう(鷹揚) こうなご(魚の名)

発音のちがいによるもの

むつかしい かけい

むずかしい かけひ

きんちさん

きんじさん

禁治産

しはす (だい) ひはだぶき
しわす (だい) ひわだぶき
れんちゅう (ほ) すなはち
れんじゅう (ほ) すなわち
ほおべに (す) すなはち

四 つかわれる範囲とその限界

現代かなづかいという一つの約束ができたわけと、その約束の内容とについては、上によって説明を終えたことになりませんが、では、このかなづかいは、どのような場合につかうものなのでしょうか。昔の文書までもこれにかえるというのでしょうか。われわれが文書をかく際にも、現代かなづかい実施以前の文章や法令などを引用する必要がしばしばおきて、現代かなづかい適用の範囲が問題となる場合が多々あると思われる。

この点については、現代かなづかいのまえがきに、

一、このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。

二、原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

とあります。その第一項にあたる部分を当用漢字表のまえがきでは、

一、この表は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で、使用する漢字の範囲を示したものである。

と説明しているのも、趣旨においては両者ともかわるところはないのです。また第二項は第一項の例外的な場合への考慮から述べられているものですが、当用漢字表のまえがきのこれに当る部分では、

一、固有名詞については、法規上その他に関係するところが大きいので、別に考えることとした。

と述べられています。實際上、どのような場合が考えられるかという、例えば、教科書などで古典を古典としてそのままの形で教える場合、著者がとくに旧かなづかいを出版社に対して指定した場合、旧かなづかいの文章を引用する場合、あるいは法規上かなで登録された固有名・商号などで法規によらないかぎり任意に変えることのできない場合などがまづさしあたって考えられます。

以上によって、多少の例外的な場合は考えられるが、われわれがものを「書くかなづかい」としては、現代かなづかいによるべきものだということができると思います。また、われわれが文書をかく場合には、なるべく一般の人々にわかりのよい、共通性の多いことばをえらんで文章をつづることが必要であるため、現代の標準的な音をもにしたこのかなづか

いによるのが、もっとも当をえた処置であると考えられますが、なお、地方によってはかならずしも標準的な発音の通りでないところもありますので、このかなづかいで、一般的には採用しなかった、くわ・ぐわ・ぢ・づも、「くわ」と「か」・「ぐわ」と「が」・「ぢ」と「じ」・「ず」と「づ」とをいいわけている地方では、とくに書きわけてもさしつかえないことにきめられています。

「クワ・カ」「グワ・ガ」および「ヂ・ジ」「ヅ・ズ」をいい分けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。(注意一)

また、現代かなづかいの制定・実施にともなって廃止された旧かなづかいは、国民的な教養として古典を読むとうとする場合には知っておく必要があるため、今後は、旧来の文書を「読むかなづかい」として、存在の意義が見出されるのです。

ドイツ、オーストリア両国との講和条約起草の下準備をする四国外相代理会議はいよ／＼十四日午後三時からロンドンで開かれるが、十三日はソヴィエト首席代表の前駐英大使フョードル・グーセフ外務次官フランス首席代表クレーヴ・ド・ミュルヴィル外務次官がロンドンに到着、四国代表はこれで全部勢ぞろいした。

これは、この小文をかいている机の上にはこばれた新聞の

報道の一節で、もちろん現代かなづかいを用いてかかれて
るものですが、なお、オーストラリア・グーセフのように長
音を「ー」であらわしたものと、ソヴィエト・ミルヴィル
のようにヴィというかなづかいがつかわれています。このよう
な報道文を読む場合だけではなく、われわれがなにかものを書
く場合にも、日本語を使うだけで外国語——とくに外国の地名・

人名を少しも使わないというわけにはいかない場合がおうにし
ておこります。ところが、現代かなづかいは、日本語をかなで書
く場合の書き方の約束ですから、外国語をかながきにする場
合にこの約束をあてはめるわけには行きません。（もっとも、
外来語といわれる種類のものは、生れは外国でも、すでに日
本に帰化したものですから、現代かなづかいによって書かな
ければならないわけですが。）とすると、われわれがかなを
つかって行う言語生活は現代かなづかいだけではまかないき
れないこととなります。どうしてもその外に外国語をかなで
書くかきあらわし方の約束が必要になってきます。でなけれ

ば、人によって、ゲーテ・ギョテ・ギョーテ：：などとまち
まちな書き方ができってくるからです。これについては、文部
省の教科書にとられている外国の地名・人名の書き方の方針
と、それをあらわすに用いるかなおよび符号表とを参考のた
めにあげておきましょう。

外国の地名・人名の書き方に関する方針

一、外国の地名・人名（中華民国の地名・人名は除く）
は、原則として片かなを用いて書き、別表「外国の地
名・人名を書くときに用いるかな並びに符号の表」の
範囲内で書く。

二、外国の地名・人名は、なるべくその国の称え方によ
って書く。

三、外国の地名・人名は、慣用の固定したものは、それ
に従って書く。

四、外国の地名・人名は、発音しやすいように書く。

外国の地名・人名を書くときに用いるかな並びに符号の表

ア	イ	ウ	エ	オ	タ	チ	ツ	テ	ト	マ	ミ	ム	メ	モ
カ	キ	ク	ケ	コ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ヤ	ユ			
サ	シ	ス	セ	ソ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ラ	リ	ル	レ	ロ

三 仮名遣いに関する問答

(昭和二十八年と昭和三十三年)

文部省調査局国語課

文部省(文化庁) 国語課で編集・刊行した国語シリーズ

(昭和二十六年と昭和四十七年)のうちの「国語問題問答」

第一集(昭和二十八年)と第六集(昭和三十三年)の中から

仮名遣い関係の問答を取り出し、原資料の順に排列したもの。

検索の便を図るため全体に通し番号を付け、また目次を掲げ

た。(原文は横書き)

目次

- 1 かなづかいの意義
- 2 不統一なかなづかい
- 3 助詞「は」と「へ」
- 4 「は」「へ」と「わ」「え」
- 5 「ゆう」か「いう」か
- 6 「とおる」か「とうる」か
- 7 「きれい」か「きれえ」か
- 8 「地」は「ぢ」か「じ」か

- 9 「はなぢ」か「はなじ」か
- 10 「づつ」か「ずつ」か
- 11 「まぢか」か「まじか」か
- 12 「世界じゅう」か「世界ぢゅう」か
- 13 「基づく」か「基く」か
- 14 「魚づくし」か「魚ずくし」か
- 15 「腕づく」か「腕ずく」か
- 16 四段活用か五段活用か
- 17 「オーイ」という呼び声は「おおい」か「おうい」か。
- 18 「大阪」を「おおさか」と書くよりも、むしろ「おうさか」と書くことに統一してほしい。
- 19 「ぢ、づ」の例外の書き方は、固有名詞にも適用しますか。次の地名の新かなづかいをお尋ねします。
- 20 よう音(わたる音)の「や、ゆ、よ」を、ルビでも小さくすべきではないか。
- 21 長音の「う」
- 22 助詞の「は」
- 23 「会津」「国府津」の「津」のかなづかい
- 24 「利雄」さんのふりがな
- 25 「今日は」と「今晚は」
- 26 「きうり」か「きゅうり」か

- 27 「は、へ、を」の除外例
 28 「じ、ぢ」「ず、づ」の書き分け
 29 「藤原」のふりがな
 30 「志津子」のふりがな
 31 「国旗」
 32 「ちえっ」
 33 「世界じゅう」と「世界ぢゅう」
 34 「本則」ということ
 35 二語連合ということ
 36 「がっかい」か「がくかい」か

第一集（昭二八・七）

1 かなづかいの意義

【問】 かなづかいというのは、発音記号ではなく、正書法に関するものです。現代かなづかいもまた、かなづかいという以上、正書法であるし、一つの語は、いつ、どこで、だれが書いても同じものであるべきです。それを、地方によって、「クワ・カ」「ヂ・ジ」など、発音を区別して書き分けてもよいと認めているのは、正書法にも反するし、標準的発音に基づくという精神とも相入れないものです。また、ある新聞は、「うなづ

【答】

く」「ぬかづく」「ひざまづく」と書き、他の新聞は、「うなづく」「ぬかづく」「ひざまづく」としているといった調子です。また「世界じゅう」「一日じゅう」があるかと思えば、「世界ぢゅう」「一日ぢゅう」があります。文部省の御意見を伺いたいのです。

「現代かなづかい」の根本の方針はそのままにいわれているように——現代語音に基いて現代語をかなで書き表わす場合の準則を示す——ことにあるのです。そしてわれわれ現代の国民にとって特に次代の日本を築くべき多くの少年・少女にとって、「現代語音を基準とする」かなづかいが、国語の書き方をやさしくし、能率的にすることは申すまでもないと思います。

「現代かなづかい」が国民特に少年たちを古いかなづかいの重荷から解放することの意義は大きいし、国語がほんとうに国民の国語になっていく上に役だつことは必ず大きいと信じます。地方によって、「クワ・カ」「ヂ・ジ」等をいい分けているところはかきわけでもさしつかえないとしておりますが、指摘しておられるように、厳密に一定したいわゆる正書法の理想からいえば、確かに細則の定め方において妥協的なところがあるといえます。

これは理論上の一貫性に縛られて、かえって多くの人が実行する上にぐあいが悪いようであってはならない。こういう心配りから国語審議会では融通性をもたせたものと思います。しかしみんなが守るべき本則・基準を示した上での妥協なのです。ですから、「ク・カ」「ヂ・ジ」の例についていえば、「カ」「ジ」と書くのが基準ですから、このほうが望ましいのですし、やがて国民全体に一定の書き方が行われることになりましょう。こういう一部の妥協性によって、「現代かなづかい」の意義が失われるとはいえませんが、

次に指摘されたように二語の連合によって生じた

「ち・づ」は「ち・づ」と書くという細則については、それぞれの解釈の違いによって、「うなず（づ）く、ひざまず（づ）く、世界じ（ぢ）ゆう」のように違いが生ずるわけで、しかもそれぞれ理論的には決して誤りとは認められません。こうした違いの生ずることははそうたくさんあるわけではありませんが、こうした種類のことはには具体的に書き方を定めることが必要と思います。文部省でもこれについては部内で論議を重ね、だいたいの基準をつくってこれを教科書に採用して態度を明らかにしました。

指摘された「世界ぢゅう」か「世界じゅう」かは、その結果、公的な書き物には今のところ「じゅう」を採用することに定めたのです。したがって、こどもに質問された場合には教科書どおりに「じゅう」と教えてくださればよいのです。

こうした問題は学問的な考え方の違いによって意見の分れることもあります。お互に研究し合うことによってよき一致点を見いだしうるものと信じます。これは国民全体の問題であり、要は現代と将来の日本国民のためによき国語の書き方をつくりあげようという仕事ですから。

2 不統一なかなづかい

【問】 こどもの本を見たところ、社会科教科書に、「わが国土」というのがあって、その中に焼津・会津・飯塚などの地名が「やいづ」「あいづ」「いづか」とふりがながしてあり、また別の教科書には、「やいず」「あいず」「いづか」となっています。いったいどちらが正しいのですか。

【答】 焼津・会津などは津の文字から濁って「づ」とするのが漢字使用の常識的な考え方ですが、一方固有名詞としてこれらの地名を考えたとき、漢字の観念を離れ

て発音そのものから、「やいず」「あいず」とかな書きする考え方も成立します。

また現代かなづかいには二語連語による濁音として貝塚・才槌は、「づ」であって、「ず」ではないと規定してありますが、手綱・手力などの手は一種の接頭語とも考えられて、これを二語連語と考えるか、複合した一語と考えるかによって、「たづな」「たぢから」と解することも、また「たずな」「たじから」と書くことも許されます。いずれにしても、「づ・ず」「ぢ・ぢ」の書き分けは現代かなづかいの最も大きな問題で、まだはっきりした解決は与えられていません。現段階では両方とも正しいものと思えます。ただこの問題について、教科書の間に不統一のあることはこまったことでして、今後統一に向かうよう努力するつもりです。

3 助詞「は」と「へ」

【問】 現代かなづかいで、「わたくしはそこへ行く」の「は」は当然「わ」に、「へ」は「え」とすべきであるのに、へんに妥協しているのは、その趣旨を考えると、どうも釈然としないものがあります。

【答】 現代かなづかいで、助詞の「は」「へ」「を」を除

外としたのは、一般に深く目の印象にはいっていることとて、これを発音どおりにすると、反対が多いことも顧慮したものでありますが、将来は発音どおりになるかもしれません。だが当分はあのおりで進むことに国語審議会では全員一致して決めたものであります。けれど除外例を設けてありますから、「わたくしわ」でも認めることになっています。

4 「は」「へ」と「わ」「え」

【問】 助詞の「は」「へ」も「わ」「え」と書くのがよいと思いますが、それが実現する可能性と時期について見とおしを教えてください。

【答】 「は」「へ」を「わ」「え」にするという可能性なり時期なりについては、現在、賛否両論がありますので、今日のところまだ何とも予想が付きません。

5 「ゆう」か「いう」か

【問】 「言う」は「ユウ」と発音するのに、新かなづかいで「いう」と書くのはなぜですか。その活用をも示してください。

【答】 「言う」は「ユウ」と発音するようですが、それを「ゆう」と書くと、文法上、動詞の活用の説明が複雑になるので、特に「いう」と書くことになっています。

なお動詞「いう」の活用は次のとおりです。

わ
ナイ
い
マス
う
え
バ
お
ッ
(または おう)

「いおう」の「おう」を分解して、語尾の「お」と助動詞の「う」とに分けて考えることも、また「おう」という一つの語尾と考えることもできます。

6 「とおる」か「とうる」か

【問】 「通る」は「とうる」ではいけませんか。いけないとすればその理由はどうですか。

【答】 「通る」は、現行の規則では、「とおる」と書くことになっていきます。それは、旧かなづかいで「とほ」と書いてあるところ(音節)は、長音ではないという考え方から出ています。

7 「きれい」か「きれえ」か

【問】 「きれい」「せんせい」などは「きれえ」「せんせえ」と書くのが正しくはありませんか。

【答】 「きれい」「せんせい」のかなづかいは、字音の「麗」「生」のかなづかい(従来のまま)によったの

ですが、その発音は、エイ(二色母音)でもエー(長母音)でもよいことになっています。

なおこれは、ローマ字のつづり方で、“kirei, sensei”などと書いて、しかも「キレイ」とも「キレー」とも読んでいるのと一致しています。

8 「地」は「ぢ」か「じ」か

【問】 「地震」「地面」または「布地」などの「地」を、新かなづかいで「じ」と書くのはなぜですか。こどもには「地」に対して「ぢ」と書くことに賛成するものがありますか。

【答】 「地」の音は、元来、漢音ヂ、呉音ヂで、そのヂは連濁のヂではありません。もとからの(すなわち本来固有の、連濁でない)音です。

現代かなづかいでは、ヂ・ジの音を区別せず、連濁の「ぢ」のほかは、すべて「じ」と書くことになっていますから、

地震 この服は 地 がよい。

なども、みな「じ」と書くのです。

また「服地」「生地」などの「地」も、この「地」であって、連濁の「ぢ」とは認めず、したがって「布地」などの場合の「地」のかなづかいも「じ」と書く

のです。

9 「はなぢ」か「はなじ」か

【問】 「鼻血」は「はなじ」ではありませんか。

【答】 「鼻血」は「はなぢ」です。その「ぢ」は二語連合によって「ち」が濁ったものです。

10 「づつ」か「ずつ」か

【問】 「一つづつ」と書くのが正しいですか。「一つずつ」と書くのが正しいですか。

【答】 「ずつ」です。これは「つつ」の連濁でなく、「ずつ」という接尾語になっているものと解釈しているのです。

11 「まぢか」か「まじか」か

【問】 「卒業の日も〔まぢか〕にせまった。」で、どちらを選択するかという問題が出ました。どちらが正しいのでしょうか。

【答】 「ま近に」で「まぢか」です。「手近」「身近」なども、みな「手ぢか」「身ぢか」です。

なお「ま近」の「ま」は、一般に「間^ま」の意味に解して「間近」と書いています。もっとも、それがほんとうの語原かどうかは未詳です。

12 「世界じゅう」か「世界ちゅう」か

【問】 「世界中」は「世界ちゅう」と書くのが正しくはありませんか。

【答】 「うち中」「村中」などの「中」は、すでに接尾語として固定しており、初めから「ジュウ」という音だと見て、文部省著作教科書には「うちじゅう」「世界じゅう」というふうに書いてあります。

13 「基づく」か「基く」か

【問】 これまで普通に「基く」と書いていましたが、近ごろは「基づく」と書いているのを見受けます。どちらがよいのですか。

【答】 今日でも公用文では、「基く」と書くことになっていますが、教科書では「基づく」と書いています。しかし、これなどはなるべく「もとづく」とかなで書いてほしいことばです。

14 「魚づくし」か「魚ずくし」か

【問】 「魚づくし」と書いてある本と「魚ずくし」と書いてある本とがあります。どちらが正しいでしょうか。

【答】 現行のきまりとしては、「魚^つ尽し」の連濁として、「魚づくし」と書くのが正しいでしょう。なぜならば、「魚」と「尽し」との二語に分けて考えられるからです。

15 「腕づく」か「腕づく」か

【問】 「腕づく」の「づく」は何の意味ですか。そして、それは「づく」ですか「づく」ですか。

【答】 「腕づくで来い。」というような文句の中で、その「腕づく」ということばの意味はわかりますが、その中の「づく」というのはどういふことかちよつとわからなくなっています。そういうふうには、だれでもすぐにわからないような場合には、すべて「ず」に書けばよいのです。

16 四段活用か五段活用か

【問】 「書く」という動詞は、「か・き・く・け」の四段に活用するから、四段活用と名づけられていたが、現代かなづかいでは、「書こう」という書き方ができたから、語尾は「か・き・く・け・こ」の五段に活用するように変りました。したがって、五段活用というべきなのに、文法教科書によっては四段活用にしています。未然形という一つのわくに、「か」「こ」の二字があるのは、現代かなづかいのつじつまが合わない点ではないのですか。

また、「大きい」のかなづかいを、「おう」と區別して、「おお」と書けといったり、同じ「つめ」を、

「なまづめ」「ひづめ」と書き分けさせるなど、現代かなづかいには無理が多いようですが。

【答】

(1) 現代かなづかいで書く文章の上に新しい口語文法を立てる以上、これまでの四段活用を五段活用と呼ぶこともあり得ること、現に大正五年、国語調査委員会編の「口語法」でも五段活用としてあります。現行の文部省著作「中等文法」では、文語法との関連と、これまでの活用表の立て方のわく内で説明しようというたてまえから、従来のまま四段活用としてありますが、これは新かなづかいでは、「オ」の段にも活用するという文法的事実を曲げているものではありません。そして、これを「ア」の段の活用語尾と合わせて一つの未然形の中に並べておきます。一つの活用形の中に二つの活用語尾を並べてはいけないというのではなく、これまでも未然形に「し・せ」または「し・せ・さ」を並べた例があります。それと同時に、未然形をアの段とオの段とに分けて説明する人があっても、さしつかえないはずで、これらのことは、文法の説明上の問題であって、かなづかいの問題ではありません。

(2) 「大きく」「多く」などの「おお」の書き方は、

「お」の長音ではなくて「おお」であるという考えに基いたものであります。

(3) 「蹄」を「ひずめ」と書けということはどこにも規定してありません。文部省著作教科書では、これを「ひ」と「つめ」とに分解して考えることを必ずしも生徒に要求しないというたてまえで「ひずめ」と書いたままであって、これを分解して「ひづめ」と書くこともできます。

それでは一語に二種の表記法があって困るではないかということになりますが、この類の語はきわめて少数で、それはわれわれが一般に使っているうちに自然に落ち着くものと考えられます。

第二集（昭二九・一〇）

17

【問】 「オーイ」という呼び声は「おおい」か「おうい」か。

【答】 普通のことばの長音は、エ列の長音もオ列の長音も、すべて「あ、い、う」の三母音字で表わしますが、感動詞は、とくに昔から「あ、い、う、え、お」の五母音字をすべて使って表わします。たとえば、

ああ いいえ ふうん ええ おお おおい

古典の例では、たとえば、

後から「おおい、おおい、田舎者、返せ、返せ」と申して
(狂言記 大日本国語辞典)

とあり、現行の教科書では多くは「おうい」となっていますが、どちらに書いても誤りではありません。

返事の「おお」も、古典に「おお」「おう」両方の用例があります。たとえば、

おお、それよ。人の話に聞きおきし、

(近松、加古教信七墓廻、大日本国語辞典)

おう、それ、それ。その伊勢本。伊勢本。

(狂言記、いの字、大日本国語辞典)

18

【問】 「大阪」を「おおさか」と書くよりも、むしろ「おうさか」と書くことに統一してほしい。

【答】 一つの希望意見としてはもっともなことですが、現行の規定では「おおさか」です。

19

【問】 「ぢ、づ」の例外の書き方は、固有名詞にも適用しますか。

次の地名の新かなづかいをお尋ねします。

【答】 現行のきまりでは――

- 1 適用します。
- 2 舞鶴^{づる} 会津^づ 国府津^こ 浅茅^ちが原

20

【問】 よう音（わたる音）の「や、ゆ、よ」を、ルビでも小さくすべきではないか。

【答】 ルビでも「や、ゆ、よ」「つ」を小さくすることは、原則としてはそうですが、実際にはむずかしい点がありましょう。

そこで、これは指導の上で注意を与え、そのつもりで読むことを教えるのが、現下の処置であると思います。

第三集（昭三〇・三）

21 長音の「う」

【問】 大多数の長音は「う」で表わすのに、少数の語だけ「お」を使うので、その使い分けがたいへんむずかしいです。それでは旧かなづかいを知らなければ新かなづかいが書けないではありませんか。

【答】 「大」などを「おう」としないで「おお」と書くのは、旧かなづかいが「おほ」であるからというわけではなく、その発音が長音でなくて（オオ）であるからという認定のもとにそう書くことになったのですが、

実際にはその発音の区別がたやすくつかないので、現代かなづかいにおける一つの悩みになっていることは事実です。しかし、その類の語は数が少なく、かつ漢字に隠れることが多いので、日常の用にはあまり不便がありません。長音とまぎらわしい語は次の二十語ぐらいですから、教師としてはこれだけを覚えておけばよいわけです。

おおい	(多い)	とお	(十)
おおきい	(大きい)	とおい	(遠い)
おおう	(覆う)	とおる	(通る)
おおかみ	(狼)	とおり	(次のとおり)
おおせ	(仰せ)	いきどおる	(憤る)
おおむね	(概ね)	とどこおる	(滞る)
こおり	(氷・郡)	ほお	(頬・朴)
こおる	(凍る)	ほのお	(炎)
こおろぎ	(虫の名)	もよおす	(催す)

22 助詞の「は」

【問】 わたしはことし小学一年のこどもの親ですが、ごく読本に「わたくしは」

とあるのを

「わたくしわ」

としてほしいと思います。当局のお考えはいかがですか。

【答】 助詞の「は・へ・を」は「わ・え・お」とすると、

あまり急激な改革のように感じられて、新かなづかい全体の実行にさしわりがあるようでしたから、それだけはもとのままになったのです。将来、世論が熟して「わ・え・お」がよいということになるまでは一般には、現行のきまりに従っていくべきです。

23 「会津」「国府津」の「津」のかなづかい

【問】 「国語問題問答」第二集（二〇ページ）に、固有名

詞の新かなづかいについて出ている中に

会 津 あいづ 国府津 こうづ

とありますが、わたしは、今日では「津」は死語と考えますので

会 津 あいず 国府津 こうづ

という一語と認めて、その「津」も「ず」のかなが書きたいと思います。

【答】 鉄道駅名のかながきのしかたについては、昭和二十三年に、運輸省と建設省地理調査部と、文部省との三者

会議の結果、問題の「津」のつく地名・駅名についても、これに意味があると認め、かつ、ふりがなの意識があると考えて「づ」とすることになりました。「こづ」も「やいづ」もその例の中にはいっています。

第四集（昭三一・一一）

24 「利雄」さんのふりがな

【問】 わたしのこども「利雄^{とし}」が、ことし一年生にあがりました。その「雄」のふりがなは、「を」でしょうか、「お」でしょうか。

【答】 旧かなづかいでは「雄^を」ですが、現代かなづかいでは「雄^お」です。

現代かなづかいでもテニヲハの「を」だけは「を」と書くことになっていますが、そのほかはすべて「お」と書くことになっています。

もっとも、旧かなづかいに目なれた人は「を」と書きたい感じがするのですが、世間一般、今日では、ふりがなにも「お」と書くようになっていきます。

25 「今日は」と「今晚は」

【問】 あいさつ語の「今日は」「今晚は」は、辞典（手もの言林）では感動詞としてあります。そうすると、これは一語と見て「こんにちわ」「こんばんわ」と書

くべきではありませんか。

【答】 お問合せのことは、現代かなづかいの適用問題の一つとして、昭和二十一年以来、一般に次のような方針がとられています。

副詞または接続詞といわれている「あるいは」「または」「では」などの「は」も、助詞の「は」に準じて「は」と書く。また、あいさつ語の「こんにちは」「こんばんは」などの「は」も、同様に「は」と書く。

26 「きうり」か「きゅうり」か

【問】 「胡瓜」の表現について、現代かなづかいによれば、第三類ウ列よう音の長音として「きゅうり」と書き表わすものと思われませんが、(国語シリーズ8「現代かなづかいの意義」53ページ)、これは語原的にも「きうり」であり、ウ列よう音の長音ではないという意見があります。これについて、どのように説明したらよいのですか。

【答】 『胡瓜』は、語原も「黄うり」であると解され、かつその発音も昔は「キウリ」でしたが(和名抄)、今日では、「キウリ」と発音する地方と「キューリ」と発音する地方とがあるようになりました。そこで標準語の問題になりますが、現代かなづかい制定以後、国

定教科書に、後者の発音をとって「きゅうり」と書き、今日でも、その方針によっております。

なお、この問題は、現代かなづかいの問題以前の標準語の問題であります。

第五集(昭三二・一〇)

27 「は、へ、を」の除外例

【問】 かなづかいにおける「は、へ、を」の除外例を撤廃するということは考えられないものでしょうか。ローマ字では“wa, e, o”一本ですっきりとしています。

この除外例のために、低学年では相当に努力と時間とを費しています。この除外例をやめれば作文能力がうんとおびると信じます。

【答】 今日のところ、この除外例をやめて「わ、え、お」一本にすることは考えられておりません。「は、へ、を」の指導については、低学年のうち、初めは「わ、え、お」と書くのを多少寛大に見て、かながだいたい全部、正しく速く書けるようになってから、徐々に「は、へ、を」の除外例に導いていくような手心を施すことなども考えられましょう。児童は作文に「わたし」と書いても、読むものにはみな「わたしは」とあることに自分で気づくことなども、おおよそ、それと

平行していくのではないでしょうか。ただし、こういう実際のな点は一律にいきませんし、またひとりの経験を全般に及ぼすわけにもいきませんから、そこは現場の先生がたの指導力にまたなければならぬところです。ただ、ことばの習得は、一般的に聞くことが先で話すことはあと、読むことが先で書くことはあとというふうに、発動面・表現面が受動面・理解面よりも少しずつ遅れていくのが自然ですから、この「は、へ、を」の除外例の問題も、そのつもりで気長く指導していくべきではないかと思われます。

28

「じ、ぢ」「ず、づ」の書き分け

【問】

「じ、ぢ」「ず、づ」をはっきり区別している地方では、それを表記に表わしていいということになっていると聞いていますが、その根拠はどこにありますか。また、現代かなづかいの考査で、そうした地方の生徒が「じ、ぢ」「ず、づ」を書き分けるたてまえで答えたときにはどうなりますか。

【答】

「現代かなづかい」の「注意一」に次のように書いてあります。

「クッ・カ」「グッ・ガ」および「ヂ・ジ」「ヅ・ズ」をいい分けている地方に限り、これを書き分けて

もさしつかえない。

この「注意一」は、その地方かぎりの許容事項ですから、全国共通の立場で行われる考査に対処しては、やはり本則どおりに、二語連合の場合以外は、すべて「じ」「ず」一本の原則で答えるべきです。ことばでも文字づかいでも、すべて全国的に通用する形を教えるのが学校教育では必要です。なお、考査問題提出に当っては、そういうことをよく考慮しておくことは当然のことです。

29

「藤原」のふりがな

【問】

わたしは、自分の姓の「藤原」に、必要に応じて「ふちはら」とふりがなをつけてきましたが、今度、孫を幼稚園に入れましたら、「ふじわら」と書くとのことでした。孫もすでに気づいて不審に思っています。どちらが正しいでしょうか。

【答】

「藤原」を、わたしたちは「フジワラ」と読みますが、古くは「フヂハラ」と読んでいました。（その「ヂ」も「ハ」も今の「ヂ」や「ハ」とは少し音が違ったと考えられています。それはしばらくおきます。）それで旧かなづかいでは「ふちはら」と書いたのです。しかし、現代の読み方のおりに「ふじわら」と書く

うというのが新かなづかいの趣旨です。このことは、ただ「藤原」だけの問題でなく、たとえば「栗」の「あわ」も「泡」の「あわ」も、みな「わ」で書くようにしようというのです。（旧かなづかいでは、それを栗の「あは」と泡の「あわ」とに書き分けるのですが、それは一般的にはむずかしいと認められるからです。）

この新かなづかいは、昭和二十一年一月一六日の内閣告示第三号で発表され、今日では法律・公用文も教科書もすべてこれによっています。

それで、お孫さんの場合でも、幼稚園で「ふじわら」と書かれていると思います。

付記：実際に「イシハラ」と読む姓の「石原」などは、新かなづかいでもそのとおりに「いしはら」と書くのです。

30 「志津子」のふりがな

【問】 「志津子」の名まえにふりがなをするとき、「しずこ」と「しづこ」とどちらがよいでしょうか。

【答】 「志津子」さんが、かりに「静子」さんであったとして、それにふりがなをつけるか、またはかな書きにするときには、「しずこ」と書かれるでしょう。それ

を思えば、すべての場合に通じて「しずこ」と書かれてもよいと思われます。

ただし、この「志津子」は「志」と「津」^{こころみ}という漢字の意味を意識してつけた名だから特別だ、とすれば別です。そうではなくて、単に旧かなづかいの万葉がなを使われたものだとなれば（志と津^{こころみ}とでは一般に熟語にはなりませんので）、やはり「しずこ」でよいと思います。ローマ字ではSizuko と書くことも一つの参考となります。

31 「国旗」

【問】 「国旗」のかなづかいは「こくき」ですか「こっき」ですか。

【答】 一字一字の音に即して読めば「こくき」ですが、実際の発音では「FOLK」です。旧かなづかいでも、「こつき」が認められてきました。現代かなづかいは「こっき」です。

32 「ちえっ」

【問】 「ちえっ」と舌うちするなど、こう書いてもよいでしょうか。

【答】 けっこうです。それから外来語のチェックなどもそうですね。

33

「世界じゅう」と「世界ぢゅう」

【問】 「世界中」の「中」をかなで書けば「世界ぢゅう」

ではありませんか。教科書にはみな「じゅう」となっています。一年生の父として迷っています。

【答】 「：中」という「中」は、もとは、熟語として「ち

ゅう」が「ぢゅう」に濁ったもの——すなわち連濁といわれるものですが、今日では、すでに「じゅう」と発音する一種の接尾語に転じて、語原とは離れてきているので、かなでは「じゅう」と書くことになっているのです。

34 「本則」ということ

【問】 「現代かなづかい」の備考第八に、

オ列拗音の長音は、オ列拗音のかなにうをつけて書くことを本則とする。

とありますが、この本則に対する例外的な書き方は何か、お示しく下さい。

【答】 たとえば「小学校」の「小」は「しょう」と書くこ

とを本則とし、これを「しょお」と書くことがあるという意味です。したがって社会が「しょお」と書いてもあえてこれを誤りとはしないという含みで「本則」とする」とあるのです。ただし、教育上では一般に本

則によることを原則としてきていますから、現代かなづかいでも「しょう」に一定して教科書には書いてあります。

第六集（昭三三・三）

35 二語連合ということ

【問】 「現代かなづかい」の第三項の「ただし書き」の(1)に、

二語の連合によって生じたち・づは、ぢ・づと書く。

とありますが、それならば「地震」も「ぢしん」と書くべきでしょう。これも二語の連合によって生じた「ち」です。ただ、上に来たか下に来たかのちがいであつて、二語の連合によって生じたぢである点は同じです。この点が新かなの最も理解しにくいところで、われわれのグループではみなそういっています。

【答】 二語の連合によって生じた「ち・づ」というのは、その二語の中での下につく語の頭が、一語では「ち・づ」であるものが、その上に他の語がついて「ぢ・づ」となった場合だけをさすのです。すなわち「〇ーぢ」「〇ーづ」というふうに。

例 ー血 鼻ー血

一月 三日一月

この「血」や「月」が上につくときには決して「ぢ」や「づき」にはなりません。

「地震」はどうかと申しますと、その「地」に元来「ち」と「じ」との二音がそなわっているので、上について「じ」だというわけです。下でも同じく「じ」なのです。

もっとも、その「じ」は、旧かなづかいでは「ち」と書くのですが、それを現代かなづかいの第三項の「ぢ・づ」は「じ・ず」と書く。

というきまりによって、あたまから「じ」と書いているわけです。

36 「がっかい」か「がくかい」か

【問】 「学会」は「がくかい」と書くべきか「がっかい」と書くべきか。

【答】 「がっかい」と書きます。すべて「つまる音」は「っ」と書くというのが現代かなづかいのきまりです。

四 鉄道駅名のかな書きのしかたについて

昭和23・10・24 運輸省、建設省地理調査部、文部省打合せ

鉄道の駅名を「現代かなづかい」によって仮名書きにする場合の原則を定め、四つ仮名その他の書き分けについて実例を示して解説したもの。

一 鉄道の駅名をかな書きにする場合は、現代かなづかいによる。

二 現代かなづかいは、地名であることによって特に発音符号的な適用のしかたをせず、一般のことばを書き表わす場合と同様、ことばとして意味があると思われるものは、同音の連呼、二語の連合の場合と認めて「ち」「つ」の濁点を用いる。その場合、ことばとしての意味の一つのよりどころとしては、漢字の表記を尊重する。(意味のある訓読みの字に対応しては、それぞれの字のふりがなのように用いる。)

ことばとしての意味の希薄なものや、漢字によってその語源をたどることのできないものは、「し」「す」の濁点

とする。

三 オ列の長音の「ふ」「は」「を」の類を「お」「う」(オの長音)「な」などのいずれにするかはその発音によるとともに、ことばとしての意味があるかないかにより、そのよりどころとしては、漢字の表記を尊重する。特に意味のある訓読みの字に対しては、それぞれの字のふりがなのように用いる。

用 例

(一) 「じ」「ず」「ち」「づ」のかなづかいについて

1 現代かなづかいの通則にしたがって「じ」「ず」とするもの。

出	雲	いづも	↓いづも
穴	道	しんち	↓しんじ
逗	子	づし	↓ずし
安治川口		あぢかはぐち	↓あじかわぐち
多治見		たちみ	↓たじみ
敷	地	しきち	↓しきじ
久	地	くぢ	↓くじ
下	路	しもぢ	↓しもじ

2 特に音訓表において「じ」「ず」の音または訓を認めているもの。

3 二語の連合の意識があると認めて「ぢ」「づ」を使用するもの。

梅小路	うめこうぢ	↓うめこうじ
西大路	にしおほぢ	↓にしおおじ
川路	かわぢ	↓かわじ
千路	ちぢ	↓ちじ
伊豆	いづ	↓いず
智頭	ちづ	↓ちず

4 一方の語の意味がはっきりしているので、二語の連合の意識があると認めて「ぢ」「づ」を使用するもの。

(ふりがなのように用いる類である。)

小机	こづくゑ	↓こづくえ
小月	をづき	↓おづき
三日月	みかづき	↓みかづき
穂積	ほづみ	↓ほづみ

江釣子	えづりこ	↓えづりこ
日詰	ひづめ	↓ひづめ
飯詰	いひづめ	↓いいづめ
上月	かうづき	↓こうづき
上妻	かうづま	↓こうづま
瓜連	うりづら	↓うりづら

安土 あづち ↓あづち

真鶴 まなづる ↓まなづる

都築 つづき ↓つづき

津も、意味があると認め、かつ、ふりがなの意識がある
と考えて「づ」とする。

5 同音の連呼を認めるもの。

国府津	こふづ	↓こうづ
杉津	すいづ	↓すいづ
郷津	がうづ	↓ごうづ
焼津	やいづ	↓やいづ
保津峡	ほづけふ	↓ほづきよう
保津川	ほづがは	↓ほづがわ
志津美	しづみ	↓しづみ

6 漢字からは、ことばとしての意味がはっきりしないので、「じ」「ず」にするもの。

綴	つづら	↓つづら
葛川口	つづらがはぐち	↓つづらがわぐち

上野	かうづけ	↓こうずけ
下野	しもづけ	↓しもずけ
上枝	ほづえ	↓ほづえ
小鳥谷	こづや	↓こずや

7 ことばとしての意味が希薄であって、漢字は万葉がなのように音を表わすだけに用いられているもの。

阿知須 あぢす ↓あじす(音訓表では、知に

「じ」の音は認めて
いない)

(二) オ列の長音等について

1 歴史的かなづかいで「ほ」「を」と書くもので「お」になるもの。

大川原 おほがはら ↓おおがわら

郡山 こほりやま ↓こおりやま

桑折 こをり ↓こおり

2 歴史的かなづかいで「ふ」「ほ」と書くもので、もとのままのもの。

武生 たけふ ↓たけふ

栗生津 あはふづ ↓あわふづ

赤穂 あかほ ↓あかほ

3 歴史的かなづかいで「ふ」と書くもので、「う」となるもの。(「ふ」が長音にならないで「う」になるもの)

萩生 はぎふ ↓はぎう

4 歴史的かなづかいで「ふ」と書くもので、オの長音となるもの。

石生 いさふ ↓いそう

松任 まつたふ ↓まつとう

能生 のふ ↓のう

麻生 あさふ ↓あそう

祝園 はふその ↓ほうその

加納 かなふ ↓かのう

和納 わなふ ↓わのう

5 歴史的かなづかいで「ふ」と書くもので、ウ、オの長音になるもの。

藤生 ふじふ ↓ふじゅう

桐生 きりふ ↓きりゅう

壬生川 にふがは ↓にゅうがわ

下名生 しものめふ ↓しものみょう

6 歴史的かなづかいで「を」と書くもので、オの長音になるもの。

青梅 あをめ ↓おうめ

真岡 まをか ↓もうか